

長津一史. 『国境を生きる ――マレーシア・サバ州, 海サマの動態的民族誌』 木犀社, 2019, 481p.

フィリピン、マレーシア、インドネシアの国境 を挟んで、スル海をふくむウォーレシアに広く散 らばって生活している海の人がいる。本書が取り あげるのは、そのなかで海サマ(人)と自称する 人々である。(著者作成の図2-1サマ人の人口分布 図参照。) 交易の港市を拠点に発展した王国の史 書・物語、西洋人の旅行誌、スペイン、英国、オ ランダ、アメリカの植民地記録などにも断片的に 報告されている。第二次大戦後、インドネシア、 フィリピン、そして最後にマレーシアが独立をは たし、国境、国籍、国家・地方行政や開発の影響 がこの人々にも強くあらわれてくる。同時に. 1960年代から新しい世代の人類学、地理学、歴史 学のトレーニングを受けた研究者によって調査研 究が蓄積されてきた。また海サマにかかわらず. 海民,海域世界の優れた民族誌など研究書が21世 紀に入って日本でも刊行されている。これらの先 行研究への行き届いた目配りは、著者の参照した 文献、法令、行政・政党資料・センサスなど公文 書等資料リストからうかがえる。

本書はこのような文脈のなかで、スル列島の西南端に位置するボルネオ(島) 北部、東マレーシア・サバ州南西のセンポルナ郡において1997年から99年に行われた臨地研究に基づいて、「国境と対峙しながら国境を生きる人びと」の変容過程を描いたものである。著者は、それ以前に、センポルナから90キロほど離れたフィリピン領(スル列島南端に位置する)シタンカイ(島)で臨地研究をおこなっており、調査村に入る際には、このシタンカイの友人の縁者(元をただせばシタンカイからセンポルナに移民した海サマ)を頼って、ある意味では、理想的な入村の仕方をしていることにも注目したい。

本書の構成は〈はじめに〉、〈序〉、〈一章〉が導 入部としておかれていて、次に3部からなる本論 が、能楽の序破急のようなテンポで展開される。 〈結び〉の後に付録があり、著者自身の作成した悉 皆調査世帯構成表、地縁的親族群(ロオク)別統 計表にくわえて、海サマ起源説話(サマ語日本語 対訳)、村で使われるイスラーム教本のサマ語(ア ラビア語表記)タイトルと概要、「礼拝の13柱の 効用」(原文、ローマ字転写など)が収録されて いる。

〈はじめに〉と〈序〉では、「国家と対峙しながら国境を生きる人びと」の「動態的民族誌」を提示するにあたって、3部構成の具体的課題を明らかにしたうえで、著者の研究の視座、調査の概要、用語を説明している。第一章「フィールドワーク」では、調査村への入り方、調査環境、そして導入、試行、能動と著者が名づける調査過程を記録している。序、一章は、本書の梗概であると位置づけることも可能であるが、最初の70ページまでは、重複するところもあり、付録として取りあつかってもよいような部分もある。

第1部「民族の生成と再編」は第二章「海サマ とはどのような人びとなのか」からはじまる。タ イトルのわかりやすさに比べ、内容は、言語から みた「民族」の分類、スル諸島における民族表象 の紹介に続き,海サマ社会の歴史的起源説話,親 族組織, 儀礼, 宗教について, 第2次世界大戦後 の研究が概略的に紹介されているだけで, はて? どんな人という疑問には、答えていない。第三章 において、サマという「民族表象」がスル海域で 生まれたものであり、経済的・政治的に周辺に位 置するとともに、さらに陸サマと海サマの差別化 が生じてくる歴史過程を第二章より詳しく説明し ている。三章の後半は、植民地期北ボルネオ時代 とマレーシア・サバ州となってからの政治史が簡 単にふれられて、最後にマレーシア 2000 年度セン サスにおけるサバ州とマレー半島部の民族別人口 が紹介される。

第四章は、サバ州における(海賊、漂海民、ムスリムというイメージをめぐって)サマ民族表象の変容を日常的な語りと公的な表象との相互関係から捉える。北ボルネオで活動するスル起源のサマは、ブルネイ・ムラユからバジャウと呼ばれていた名残で、植民地時代の資料でもバジャウ名称

が使われている。バジャウは「原住 native 民」と公的に(英国領時代のセンサス報告類で)記録され、1951年の北ボルネオ・センサスでは、「主要な(三つの)先住 indigenous 民」の一つとして明示されるに至っている。1963年の独立後は、スルでの被差別を脱して、バジャウもブミプトラ(1980年代から流布する政治的カテゴリーで、マレーを含む先住民)と認められるようになり、「サバ版マレー」として(フィリピンでは蔑称であった)バジャウ名称を使うサマも増えているという。フィールドワークでの日常的な実践の観察や事例にもとづいて、表象する側と表象される側との相互作用の中に定位された語りとして現れてくる民族表象のダイナミクスを明らかにしている。

1950年代からセンポルナ郡に定着した海サマと いう人びとは、独立後政府が関与する開発プロ ジェクトを通して、国家・行政と深く関与しだし、 自らのアイデンティティ・社会の在り方を主体的 に大きく変容させていく。第Ⅱ部の最初、第五章 で、センポルナ郡の中心であり、調査村のあるセン ポルナの町 (プカン) の社会的分断と政治的権威 の再編成過程を再現し、第六章では、船上生活時 代のもやい拠点から大規模な杭上集落に発展した 調査村に焦点を合わせて、その現況、人口、そし て歴史的に遡って移民/難民の差別化, 政治的 権威の形成と変容を跡づける。第七章「開発と国 境 | では、六章の分析で析出された「先住者 | と 「移民」という「集団分類」と、自己/他者表象の 様式が、「社会的に実体化」する状況を活写し、そ れがじつはアイデンティティのゆらぎであると結 論する。

第Ⅲ部では、サバ州での公的な規制になじみながら、それをしたたかに利用して生きていく海サマの社会変容が4章にわたって論じられる。マレーシアの半島部で1970年代前後から「イスラーム化」がますます顕著になり、1980年代になるとグローバルなイスラーム復興の波を受ける。第八章では、このような状況の下で、サバ州において法、行政、教育のイスラーム的制度化が進行する有様を主として公的データでくわしく紹介している。第九章は、それに反応する調査村での宗教をめぐるポリティクスが、イスラーム教本(パルクナン)の分

析を含めて、具体的事例に即して論じられる。公 的な回路を通じたイスラーム化によって「正しい」 ムスリムとして承認させ、(陸サマなど海サマを差 別視していた)他のムスリムから差別されない社 会的な地位を獲得しているというのが論点である。

次に、第一○章と第一一章において、海サマにとってのイスラーム化の社会的意味をふまえて、イスラームと伝統的慣習(アッダト)との相互関係を軸に宗教実践の変容を考察する。ポイントはイスラームの視点から変容を眺めるのではなく、海サマの人々の主体的な信仰、それに伴う儀礼に焦点を当てていることである。

第一〇章では、1960年代にみられる「伝統的な」信仰とそれにそった儀礼の棚上げを行い、当時の村のイスラーム指導者が「アッダト(慣習)とみなす」儀礼と「おおよそイスラームに従っていると認める」人生儀礼との分類を提示する。イスラーム化に伴って、儀礼が行われなくなった理由と背景が概略的に説明される。

第一一章では、衰退する伝統的な祖霊儀礼(マグンボ・バイ・バハウ)とイスラーム受容後導入された死者儀礼(マガルワ)の二つの儀礼に焦点を当てて、観察事例における参加者、主催者、イマム・霊媒などの執行者の系譜関係、居住空間などがくわしく分析される。

マグンボというのは、祖先霊(ンボ)をまつる ことで、祖先霊にバイ・バハウ(陸稲の初穂)を 供える儀礼である。1960年代に船上生活が中心で あったタウィタウィの海サマを調査したアメリカ の人類学者は、タウィタウィ、シブトゥ、センポ ルナを結びつけるこの儀礼のネットワークが、海 サマを他から区別する下位文化 (バンサ) になっ ていたとまでいう。(H. Arlo Nimmo, Magosaha: An Ethnography of the Tawi-Tawi Sama Dilaut, Ateneo de Manila University Press, 2001, p. 168. [magosaha は サマ語で seeking a livelihood の意味]) このネット ワークは実証されているわけではないが、この儀 礼が海サマの中心的な宗教実践であったことは確 かなようである。このもっとも重要であった儀礼 の衰退とそれにもかかわらず持続される過程で. 海サマのあいだに社会的分断が生じているという 著者の指摘は重要である。著者はマグンボ儀礼を 「初米儀礼」と呼んでいるが、稲魂 (ンボ・パイ) に対する儀礼と間違われかねないので、筆者は祖 霊儀礼とよびかえた。本来の意味での新嘗祭とす る方がよいのかもしれない。

二つめの死者(霊)儀礼は、調査時に盛んにおこなわれるようになった儀礼で、イスラームの霊魂概念にもとづいて死者霊(アルワ)の平安を祈る儀礼と説明される。「イスラームの正当な実践」であるとされ、公認イマムによって儀礼が執行される。しかし、一般の海サマの言説ではアルワを伝統的なスマガトと同一視し、マガルワ儀礼を「スマガトに食事を供する儀礼」と呼んでいる。儀礼の解釈の「多声性」が事例に即して指摘される。公的イスラームが浸透するなかで、マガルワのように儀礼が再構築されるのは、ムスリム意識が「オブジェクト化」される結果もたらされた、「非組織的ではあるが創造的かつ能動的な宗教実践面での適応」であるという。

〈結び〉では、Ⅰ部、Ⅱ部、Ⅲ部の梗概の形で、著 者の意図. 本書が示唆する研究の方向について丁 寧に述べられている。民族誌としての特色をあえ て挙げれば、人類学者 Clifford Sather によって同じ 村における, 1964/65年の住み込み調査, 74年と 79年の短期フォローアップ調査に基づくデータが 利用できたことであろう。著者は彼と緊密な連絡 を取って、彼の成果を本書で活用することによっ て、サバ州の国境社会に生きる海サマの(二度と 繰り返されることがないであろう) 社会変容過程 を実証的に描いた動態的民族誌とすることに成功 している。しかし、筆者は本書を「民族誌」と呼 ぶのに躊躇する。それは、海サマの先行研究によっ て取り上げられなかった第Ⅱ部の開発過程、第Ⅲ 部のイスラーム化の問題を主テーマとすることに より、島嶼部東南アジアにおける「宗教の政治」 や「開発の政治」を周辺の視点から比較考察する 地域研究の枠組みを提供しているからである。本 書を基点とすることによって、島嶼部東南アジア の比較研究への新たな道を開いたといえる。

国境を生きる海サマとはどんな人なのかという 疑問で始まる本書を通して読み終えると、特にた くさんの観察事例の語りを通して、海サマの生き 様が身近に感じられるようになる。梗概では伝え られない、細部の観察がマクロな理解に光をあて る作品となっている。それだけに、正誤表は付い ているものの、誤記、脱落が残っているのは残念 である。

(立本成文・総合地球環境学研究所顧問)

斎藤照子.『18-19世紀ビルマ借金証文の 研究──東南アジアの一つの近世』京都大学 学術出版会, 2019, xi+367p.

本書は、コンバウン朝ビルマで庶民層も含め広 く用いられたテッガイッと呼ばれる各種証文を史 料として、当時のビルマ社会における人と土地を めぐる契約関係、さらにそうした契約関係を支え る社会の在り方について考察した重厚な研究であ る。テッガイッは、黒色の厚手の紙で作られた折 り畳み写本や、椰子葉を乾燥させた貝葉に書かれ、 僧院などを中心に保存されていたものが. 現在で は図書館等公共機関に移管され、またマイクロ フィルムでの収集やウェブ上の公開により、広く 利用可能となっているという。しかし著者によれ ば、テッガイッという言葉について知る人の数は 日本ではようやく二桁、本場のビルマでも「100 人に届くかどうか」ということであり、本書は従 来十分に知られてこなかった地方史料を本格的に 活用した, 世界的に見ても先駆的な実証研究と言 えるだろう。中国史を専門とする評者は、ビルマ 史に関しては全くの門外漢であるが、以下、テッ ガイッと同時期中国の契約文書との比較にも触れ つつ、本書の内容を紹介してゆきたい。

序章において設定される課題は以下の如くである。第一に、可能な限り広くテッガイッを渉猟・読解し、借金証文という視点から $18 \sim 19$ 世紀ビルマ王国に進行していた社会経済的変化をとらえ、その背景と歴史的意味を明らかにすること。第二に、テッガイッが契約として社会的に認知され、契約の当事者双方にその履行を促すことができたのはなぜか、という問いの答えを求めること、である。大きく 4 部に分かれる本論のうち、第 I 部から第 III 部は主に上記の第一の課題に答えるものであり、第 IV 部は第二の課題を扱う。

第I部「借金証文とその背景 | の第1章「借金証 文の背景---中央平野部の風土と社会経済変動| では、地域及び時期の双方から考察が行われ、こ の時期の借金証文が多く残されている中央平野部 は半乾燥地帯であり、灌漑網を伴った耕作可能な 農地が人口に比して相対的に希少であったこと. 及び、コンバウン朝中期以降の自然災害や戦争に 伴う増税、商品経済の発展、といった趨勢が借金 の必要性を高めたこと、が指摘される。第2章「ビ ルマ貨幣中の中のコンバウン時代――貨幣私鋳の 伝統と改革の試み」では、ビルマの貨幣史を概観 した上で、銀に銅を加えた合金が主に用いられて いたコンバウン朝の貨幣使用状況を解明する。民 間で自由に鋳造されていたこれら貨幣の品質は 様々であり、交易に際しては貨幣鑑定人や計量人 の存在が不可欠であった。18世紀末に始まった通 貨統一の試みは失敗したが、その後、英領となっ た下ビルマで普及したルピー貨を模して1860年代 に王政府が機械製硬貨を発行するに及んで、 通貨 の統一が進行した、とする。本書のなかで第2章 は、証文の貨幣表記を読み解くための前提的考察 と位置付けられる部分かも知れないが、品質も 様々な称量貨幣が商品経済の活発化を支えてゆく 状況は、同時期東アジアの銀流通と比較しても共 通性が感じられ、 興味深い。

第Ⅲ部「借金担保としての人」では、人身を担 保とする借金証文が取り上げられる。第3章「18 世紀末~19世紀の人身抵当証文---債務奴隷契 約」では、人身抵当証文の残存状況、書式、王都 周辺と農村それぞれにおける債権者・債務者の社 会階層. この時期の債務奴隷の歴史的位置づけ. などの問題が、広い視野から論じられる。一方、 第4章「サリン地方の人身抵当証文」は、中部ビ ルマのサリン地方の地方豪族を債権者とする104 点の人身抵当証文に焦点を当てて具体的な分析を 行うが、この両章の主な焦点は「債務奴隷」の身 分的性格にある。「債務を負うことによって不自由 労働の境遇に置かれ、債務を返済することによっ て自由を回復する」という点で、これらの契約に おける債務者は「債務奴隷」といえるが、主人替 えは債権者の恣意による売り渡しでなく債務者の 希望によって行われ、また上乗せ借金の要請をす るのも債務者であった。こうした点から見れば、契約の主体となり得るこれらの「債務奴隷」と自由民との身分的境界はなく、人身抵当契約は対等な人間の間の経済的な取引と見なされていた、という。

第Ⅲ部「借金担保としての土地」は、現存する テッガイッのうち過半を占める農地 (主に水田) を担保とした借金について論ずる。第5章「借金 証文と農地の流動化――ビャンヂャ村の事例 | で は、上ビルマの一つの村を取り上げて、借金を媒 介に私有地のみならず寺領地や王領地でも流動化 が進み、有力者のもとに農地が集積されていたこ とを示す。第6章「農地抵当証文と農地の流動」で は鹿児島大・愛知大のデータベースを用いてコン バウン朝の農地抵当証文の網羅的な検討を行い. 同様の趨勢を指摘するが、農地を完全に売り切る 例は王都周辺などの一部地域に限られ, 抵当に比 べて数も少なかった。その理由は、農地を開墾者 とそれを耕作し続けた子孫たちに強く結びつける 慣習法に裏打ちされた観念が存在していたからで ある、とする。

第IV部は、「ビルマ近世はどのような社会であっ たか」という表題のもと、如上の契約関係を支え る社会のシステムについて論ずる。第7章「契約 社会としてのビルマ近世社会――借金証文の実効 性を支える社会システム」での考察によれば、借 金などの契約に際しては証人など複数の立会者が 臨席し、そのなかには公共的な財の寄進者や在地 領主、村長などが多く含まれていたが、彼らは行 政上の職務として公証機能を果たすわけではなく、 契約の効力は地方社会で彼らが享受している尊敬 や精神的影響力によって、 ゆるやかに支えられて いた。証文の法的効力はあらゆる法廷で認められ ており、契約によって生ずる私人の債権や所有権 を尊重することは, 王朝政府から在地権力, 地方 民衆に至るまで共有された観念であった。第8章 「質入れ地をめぐる紛争の調停――地方社会におけ る紛争解決メカニズム」は、紛争解決の側面から、 契約を支える秩序の在り方を論じる。紛争の主な タイプとしては、質入れ後に世代が交代してもと の契約の記憶が薄れるなかで債務者・債権者双方 が祖先から受け継いだ土地であると主張するもの、

及び、均分相続による農地の細分化のなかで複数の共同相続人の間で土地の利用や抵当設定をめぐって争いになるもの、の両者がある。本章では、二つのタイプそれぞれについて具体的訴訟事例が取り上げられ、分析されている。当時の地方法廷の制度は、在地領主、村長、寺院の設立施主、僧侶など、地方社会で威信のある人物なら誰でも判事になれ、また勝訴、敗訴の黒白をつけるのでなく双方の言い分を聞いて合意をめざすという調停的性格のものであった。訴訟費用の高さが壁になってはいたが、この制度は人々があまり危険を感じずに利用できるものであり、紛争解決において有効に機能していた、とする。

補章「歩いて作った村の境界――19世紀中部ビ ルマにおける村落境界紛争とその調停」は、18世 紀末から19世紀前半にかけての村落境界紛争の事 例を取り上げる。当時の村の境界線は明確なもの ではなく、紛争が起こった際には上級の権威(こ こでは枢密院や騎馬隊長官) に訴えが行われ、そ の勧告に従い両村の村長が新たな境界線に沿って 誓詞を唱えて共に行進するという祭典風のイベン トを通じて、村民の間に認知や支持が形成された、 とする。結論では、本書の論点をまとめた後、本 書の表題にある「近世」という語に言及する。著 者によれば,本書でいう「近世」とは,国民国家 の統合や貨幣経済の浸透といった形で単純に近現 代を準備する時代という意味ではなく.「独自の風 土や慣習などそれぞれの地域が培ってきた広義の 文化が、新しい変化を包摂しながら、それを翻訳 し、社会が受容しうる形で動かしているともいえ る時代」(p. 346) を意味するという。

以上、本書の豊富な内容を簡単に紹介してきたが、以下、興味深く感じた点や疑問点をいくつか挙げておきたい。第一に、モノとしてのテッガイッに関してである。序章では、現在残るテッガイッの多くは折り畳み写本に書かれていること、及び同様の内容が貝葉に書かれていることもあるがそれはコピーであって、折り畳み写本のほうが正本と思われること、を述べている。しかし、一冊の折り畳み写本のなかに、複数の証文やそのほかの記事も入り混じって書かれているとすると、本書のなかで述べられているような、証文を廃棄した

り (p. 184), 新たな債権者が証文を買い取ったり (p. 207) といったことは, やや困難なのではないかとも感じられる。具体的な契約の場においては, 債権者が自分の折り畳み写本を持参し, 筆写人に書きこんでもらうという形になるのだろうか。これを中国や日本と比較すると, 近世の東アジアでは, 個別の契約ごとに一枚の紙に内容を書きこみ, 売り手(債務者)や証人が連署して買い手(債権者)に渡す, という方法が普通である。中国では, 複数の契約内容を記録した「置産簿」などと呼ばれる帳簿も見られるが, それは多くの土地資産を管理する便のため契約書をまとめて書き写したものであり, 契約の正本とは異なる。

第二に、用いられる史料用語の解釈についてで ある。本書においては、「質に入れる(取る)」と いう意味の「パウン」、及び「買う」という意味の 「ウエー」「ウェーユー」といった原語が紹介され、 人身抵当証文では無造作に「売る、買う」といっ た語が用いられているのに対し、土地抵当証文の 場合は「質入れ」という語が用いられる。という 興味深い指摘がなされている (p. 123)。 明清中国 の場合、「売」という語と、一般に「質入れ」と訳 される「典」との境界は曖昧であり、また「典」 も日本の一般の質入れと異なって、質流れの期限 が設定されていない (この点、ビルマも同様であ るようだ)といった点が注目されてきた。また、 「売」「典」されるのは実体としての土地そのもの なのか、或いは土地の上で営まれる経営収益の権 利なのか、といった点も含め、当時の契約諸関係 を当時の人々の認識に即して整合的に再構成する 試みが行われている。ビルマにおける「パウン」 や「ウエー」についても、語義の分析を通じ、中 国の「典|「売|等とより深いレベルで比較するこ とが可能かもしれない。

最後に、第IV部で扱われた「契約を支える秩序」の問題について述べたい。民間の多様な経済関係が契約を通じて形成されているにもかかわらず、それを支える秩序の在り方が、私たちが普通考える「近代的」なそれとは異なる独特の性格を持つ、ということは、中国においても同じである。本書で指摘される、地方社会の人々のパーソナルな影響力によってゆるやかに発揮される公証機能や、

当事者の合意がないと決着しないといった民事的 訴訟の在り方などは、中国と共通する点がある。 しかしまた、別の面から見るならば、「訴訟当事者 双方が同意した人物を裁判官にできる」といった ビルマの司法システムの「柔軟かつ不定形」さの 程度は、大規模な官僚制度のもとで裁判が行われ ていた中国とは大きく異なる。「契約を支える秩 序 | のこうした共通性と多様性をどのように捉え るか、興味がそそられるが、いずれにしても今日 では、理念的な近代西洋モデルとの距離でアジア 諸地域の特殊性を測定するといった段階は過ぎ. アジア諸地域の秩序の内在的な理解に立脚した新 たな比較史的考察が求められているというべきだ ろう。本書は、ビルマ史の専門家のみならず、そ うした試みに関心をもつ多くの研究者にとって. 大きな示唆を与えてくれる。

以上、評者の関心に引き付けすぎた紹介となったかもしれず、また素人故の誤読もあるであろうことをお詫びしつつ、本書を通じ多くの知識と刺激を与えていただいたことを感謝して擱筆したい。 (岸本美緒・公益財団法人東洋文庫研究員)

早瀬晋三. 『グローバル化する靖国問題― 東南アジアからの問い』 岩波書店, 2018, vii+248p.

本書の著者は、「靖国問題」は基本的に、中国や南北朝鮮と日本との問題であるかのようにとらえられており、「親日派の多い東南アジア諸国においては、その問題はさほど深刻なものではない」と考えられがちであるが、日本の国力にかげりが出てきた今、問題はアジア全域へとグローバル化しているという懸念を抱いており、本書はそれに対する警鐘から始まっている。

著者早瀬晋三はフィリピン史の専門家で、戦前・戦中の日本との関係を中心に多くの著作を刊行している。中でも今回の『グローバル化する靖国問題』は、2007年に岩波書店から出した『戦争の記憶を歩く――東南アジアのいま』を念頭においてそれを発展させた形で書かれている。その前著は2001年から6年連続で小泉首相が靖国神社に参

拝した反響が、東南アジアから日本にあまり届か なかったことの意味を考えるため、自らの足で、 シンガポール、マレーシア、インドネシア、タイ、 ミャンマー、フィリピンなど、戦争中日本が直接・ 間接に軍事支配した地域の戦争遺跡や博物館を訪 ねて歩き、東南アジアの人々の「戦争の記憶」を 伝えようとして書き記されたものだった。いわゆ る「戦跡」として知られ観光の対象になっている ようなものばかりではなく、人々の心に残る戦争 の記憶をたどったもので、東南アジアの人々の 「声」を拾い集めようとする努力であった。評者が 感銘を受けたのは、早瀬がその内容を英訳し、A Walk through War Memories in Southeast Asia (2007) 年, New Day Publishers) と題して出版し、これを 留学生など多くの東南アジアの人々に読んでも らって、そこからのフィードバックを大切にして いたことである。

今回の著作はそういった声も反映させたものであるが、問題の焦点を「靖国」問題にあて、早瀬はそれを東南アジアの人々がどうみているかを、戦争の記憶と絡ませながら探った。具体的には編年的にこの問題を追い、その都度それを東南アジアのメディアはどのように報道していたかという視点から紹介している。

「第1章 靖国問題のはじまり」において早瀬は、 いわゆる「靖国問題」は1985年8月15日に、当 時の中曽根康弘首相が靖国神社に公式参拝したこ とに対して中国や韓国が猛烈に批判したことが始 まりだと捉える。実は首相による靖国神社参拝自 体は戦後間もない吉田茂首相の時代から行われて いた。ついで岸信介, 佐藤栄作, 田中角栄, 三木 武夫. 福田赳夫. 鈴木善幸. また1984年には中曽 根自身も参拝している。違っているのは、それま ではいずれも私人としての参拝であったというこ とである。ところが1985年の中曽根の参拝は、首 相としての公式なものであったということで問題 が大きくなった。それまで日本の国内問題だとし て報道もしなかった韓国が「アジア諸国を侵略し た第二次大戦を正当化する日本政府の新たな動き」 だとして予想外に激しく批判したのである。また シンガポールの華字紙や香港や中国の新聞も批判 的な報道をした。

この両国が問題にしたのはA級戦犯の合祀問題である。実は1978年10月に、交代したばかりの新宮司によって、靖国神社には密かにA級戦犯14人が合祀されていた。昭和天皇はそのことの深い意味を懸念し、それまでしばしば行っていた靖国神社参拝を取りやめたといういきさつがある。しかるに中曽根首相はそれを知りつつ公式参拝したのである。

ただその段階では、それに対して東南アジア諸国は政府も国民もメディアも独自に声をあげることはなかった。シンガポール、マレーシア、ビルマ(当時の名称)の英字新聞は外国通信社の報道を転載して中国や韓国の反発ぶりを伝えるという形で取り上げたが、独自の報道はなかったし、またこれ以外の国々は報道もしなかった。その時の中国・韓国からの激しい反発に対応して、それから10年間首相の「公式」参拝は行われなかった。1995年に橋本龍太郎首相が「内閣総理大臣」と記帳して参拝したが、この時も東南アジア諸国は独自の記事は報道していない。

早瀬は、その当時は日本の国際的な経済力がほほピークに達しており、東南アジア諸国に対する日本のODA(政府開発援助)や資本投資も最高潮であり、その恩恵を受けていた国々は日本に対して批判的な声を上げる余裕はなかった。その一方、中国や韓国の国際社会における発言力や経済力もまだ極めて弱く、日本との力関係は明らかにアンバランスなものだったという。

次いで、2001年に就任した小泉純一郎首相は、この年の8月(15日は避けたが)に靖国神社参拝を再開し、これに対し再び中国や韓国は激しく反応した。彼はその後2005年まで毎年参拝を続けた。この時期の靖国問題は「第2章 二国間問題から地域問題へ」と題して論じられている。早瀬は、その時の東南アジア各国の英字紙の報道ぶりを詳細に分析し、それに基づいて1985年の中曽根首相の場合や1995年の橋本首相の場合とは明らかに違う論調が見られ、外国の記事の紹介だけでなく独自の記事も登場したことを指摘する。東南アジア各国に戦争の記憶を呼び起こし、互いに隣国での報道状況にも気をくばり、情報を共有する中で、各国は共通の対日観を共有し、歴史問題に関する

連携が見られるようになったというのである。ただし小泉首相の参拝はその後も毎年続いたが、なぜか東南アジア諸国での報道は2001年よりは下火になっていた。

ところが2005年になると領土問題や教科書問題もからんで韓国や中国の反日感情は非常に悪化し、反日デモが相次いだ。そしてそれは東南アジアにも大きく広がっていった。この時期の報道ぶりは「第3章 グローバル化する靖国問題」で分析されている。反日デモを伝える東南アジア各国の報道は、これまでと大きく違って大胆に独自の批判的な見解を掲げるようになっていた。重要なことは、このころには、日本の国力が衰え、東南アジア諸国の経済発展に果たすODAの比重も小さくなってきており、日本とアジア諸国の力のバランスが大きく変化していたことであるという点を早瀬は強調する。

弱まりゆく日本を前に、それまでも決して忘れられてはいなかった戦争中の日本の様々な残虐行為に対する「記憶」が、東南アジアの人々の心によみがえってきた。東南アジア各国はそれぞれに日本との苦い過去を持っており、それが現在の日本との関係にも大きな影を落としている。日本人もそれを認識してその歴史と正面から向かい合わねばならないことを早瀬は強調する。日本の政治家は何かというと「謝罪」をするが、彼らは「許し」の意味を十分に理解しないままにそれを繰り返している。日本は首相だけでなく、政治家、国民も十分に問題の本質を理解していない、という東南アジアの人々の本音を理解する必要があると説く。

早瀬のこの著作は靖国問題という,一見東南アジアとの間では主要案件ではないかのように思われがちな問題を通じて,実は日本の読者に戦争期の東南アジアの歴史を想起させ,それをわれわれはもっと真摯に受け取るべきだと訴えるものである。戦時期のインドネシア史を専門とする評者自身,常日ごろ,世論調査における対日好感度の高さや,旅行者が受ける温かいもてなしなどに惑わされて,日本人の多くは,戦争の傷跡の深刻さをま感しようとしていないというもどかしさを感じ続けている。日本の政治家たちは時がたって歴史の証人が姿を消し,事実が人々の記憶から遠のく

ことを期待しているのかもしれないが、日本が正 しく清算しない限り、それは歴史教育や人々の語 りを通じて東南アジアの国々の次の世代の心の中 に受け継がれていくものと評者も思う。

それではどうすればよいのか。早瀬は「終章 東 アジアのなかの日本」においてそれに対する提案 を行っている。彼は、ともかくも「歴史に向き合 う | ことの重要性を訴える。事実関係が十分明ら かになっていない. ということを理由に学校教育 において現代史、とりわけ戦争にまつわる歴史を ほとんど教えていない日本であるが、先ずこれを 正面から見据えなければならない。その際にどう してもナショナリズムが混入してくる自国史では なく、世界史の一部として日本史を客観的にとら えなおすことが必要であると説く。つまり近隣諸 国の国民をも読者として捉えることができるよう な歴史教科書が必要なのだという。早瀬はアセ アン諸国が常に国益よりもまず地域共同体の利益 を優先してきたことを指摘し、それぞれの国益よ りも大切なものを優先する姿勢が日本にも必要な のだと説く。

彼はまた、戦犯が合祀されておらず、さらに無宗教の国立墓地の設置を模索することが必要だと訴えるが、そこにおいては日本人だけでなく、戦争による各国のすべての犠牲者をしのぶような形が必要だということを強調する。

このように著者の論点は極めて明確であり、その多くを評者も共有するものである。しかし、以下において幾つか感じた「物足りなさ」を列記させていただきたい。一つは、本書はタイトルで靖国問題が「グルーバル化」したというという視点で論じているのであるが、なぜそうなっていったのかについての背景分析を、大国としての日本の国力に陰りが見えてきたことのみに帰して、東南アジア各国の内的要因、あるいは日本との個別的な関係についてあまり触れていない、ということである。

さらにもうひとつは、論考はそれぞれの時期の 東南アジア各国の新聞の報道ぶりの詳細な分析に 依拠して進められており、その手法は極めてユニークかつ非常に「実証的」なものであるが、残 念なのはその資料を英字紙に限定したことである。 早瀬はあえて英字紙を使用することの積極的なメ リットを述べているが、しかし英字紙の場合読者 として外国人が想定されているため、その選択す る記事の種類や内容はしばしば現地語の新聞とは 異なっている。たとえばインドネシアの場合を取 り上げても、ここで早瀬が引用している Jakarta Post と、同じ新聞社から発行されているインドネ シア語のKompasとでは掲載されている記事が大 幅に違っている。各国それぞれに異なる歴史的体 験や現在かかえている国内事情や対応があり、そ れをあぶりだすことは英字新聞では限界があるの ではないかと思われる。特に今回のテーマの様に 国民感情や、自国の歴史に対する解釈などが問題 になっている場合は、地元の人々を対象とした現 地語の新聞の重要性は大きい。とはいえ、実際い くつもの言語にわたり東南アジアのローカル紙を 読むということは一人の研究者では不可能に近く, 無理難題であることは承知のうえである。しかし ながら例えば翻訳を他に依頼してでも良いので現 地語の新聞にもあたることはできなかっただろう か。もちろんそれは実は著者だけに求めるのは酷 なことで、今後各国の研究者が引き継いでやって いくべき仕事であると思う。

もう一つ、東南アジア諸国は情報を共有する中で、共通の対日観を共有するようになったと早瀬は指摘するが、それはどのように実証できるのであろうか。各国が体験した日本占領時代の歴史には大きな多様性があり、またその後の関係も一様ではないため、現在の対日感情もさまざまだと思われ、著者も当然それを認識していると思うが、東南アジアをブロックとして語るという枠の中で、国による差異を描くことが薄れてしまっているように思われる。

とはいえ、これらのことは本書の価値を減じる ものではなく、通常自分の専門とする地域のこと しか知らない評者は、広く東南アジア全域の状況 について本書から多くを学び、多くのことを考え させられたということを付け加えておきたい。

(倉沢愛子・慶應義塾大学名誉教授)

山口元樹. 『インドネシアのイスラーム 改革主義運動――アラブ人コミュニティの 教育活動と社会統合』慶應義塾大学出版会, 2018. ix+282p.

東南アジア島嶼部にはアラビア半島南部ハドラマウトからの移民(その子孫も含めてハドラミーと呼ばれる)が居住しているが、同様に移民コミュニティを形成した華人ほどの注目を集めないできた。それは、絶対数が少ないのに加え、ホスト社会の住民と同じイスラームを信奉して、「摩擦」が少なかったこととも関係があるだろう。特に日本人にとっては、華人が巨大な中国とのつながりで身近な関心事となるのに対して、アラビア半島は異質で遠い世界に感じられてきたこともあるだろう。それゆえに、アラブ系住民がホスト社会で果たした役割はあまり認識されないできた。

本書は、国民国家形成期のインドネシア(植民 地期はオランダ領東インド) におけるアラブ系住 民が設立した団体イルシャード(「導き」を意味す る) の教育活動を通して、外来系住民の社会統合 の問題を論じている。著者は、学部時代に東洋史 学科でイスラーム史を学ぶ中でアラビア語文献解 読の訓練を受け、その後大学院で東南アジアのア ラブ人に関心を持つようになり、インドネシアに 留学したという。イスラーム研究者としても東南 アジア研究者としてもやや異色の道のりを経て本 書のテーマに辿りついている。それはインドネシ ア語の定期刊行物・文献のみならず、従来植民地 期研究で使用されるオランダ語の植民地文書・文 献に加えて、アラビア語の定期刊行物・歴史書等 を史料とするという手法でインドネシア史に接近 したことに反映されている。このようなアプロー チでインドネシアのイスラームを扱う研究者は世 界でも数えるほどしかない。また、東南アジアの アラブ人に関する研究は海外ではそれなりにある ものの、体系的に扱ったものはまだ限られている。 本書はインドネシアのアラブ系住民史を本格的に 扱った先駆的な作品と位置付けられる。

本書の構成は以下のようになっている。

序 章 問題の所在――インドネシアのイス

ラーム改革主義運動とアラブ人の社会 統合

- 第1章 イスラーム改革主義運動の源流
- 第2章 イスラーム改革主義運動の始まり
- 第3章 インドネシア・ナショナリズムの形成
- 第4章 アラウィー・イルシャーディー論争の 収束
- 第5章 ハドラマウトかインドネシアか
- 第6章 独立後のインドネシア社会への統合
- 終章 インドネシアにおける統合の原理とし てのイスラーム

序章では、植民地期インドネシアにおけるアラ ブ系住民の歴史を特にイスラーム改革運動との関 わりで概観したあと、先行研究を整理して本書で 扱う課題を明言している。それによると、ここ20 年ほどインドネシアのハドラミーの存在は研究者 の関心を集めているという。前近代において「(東 南アジアの) アラブ人は移住先の社会と深く混淆 し. 複合的なアイデンティティを持った | (p. 13)。 それに対し、「近代になると、植民地国家が領域、 人種, エスニシティといった概念を明確化し, そ れが個人のアイデンティティを規定するように なった」(pp. 13-14)。東インドの住民区分では、ア ラブ人は「外来東洋人」に分類され、「原住民」す なわちプリブミ1)とは異なる法や社会制度が適用 された。植民地期のイルシャードを詳細に論じた モビニ=ケシェー [Mobini-Kesheh 1999] は、こ のように制度的な枠組みに規定されるようなアイ デンティティが形成されるようになったという観 点から、イルシャードを捉えた。そのため、その 教育活動は植民地の公教育制度からほとんど分離 し、中東が志向された結果、インドネシア人とは 異なるハドラミーとしての意識が育まれたと結論 付けた。

しかし著者は、アラブ人社会がホスト社会から 分離していく動きを中心にしたこの議論に疑問を 呈した。独立後に多くのアラブ人がインドネシア に留まることを選択したことの説明がつかないか

¹⁾ マレー系の先住民。独立前は通常「ブミプトラ」と呼ばれていた。

らである。従来の研究と同様に移住アラブ人が中 東アラブ地域との緊密なネットワークを有するこ とを重視したうえで、著者はふたつの課題を提示 した。第1にイスラーム改革主義団体としてのイ ルシャードの教育活動を考察し、その中に指導者 であるスーダン出身のウラマー (宗教学者) のスー ルカティーを位置付けること。第2に、それを通 してアラブ人コミュニティがホスト社会に統合さ れて行く過程とその要因を検証することである。 かくして本書は,「イスラーム改革主義」の東イン ドへの波及を再検討するとともに、発祥地から離 れた地でその運動がどのように展開するのか. つ まりウラマーが宗教教義と自らを取り巻く状況と どう折り合いをつけるのかというその営為を描く ことになる。イスラーム世界におけるウラマーの ネットワーク、あるいは著者の言葉を借りれば「超 地域的イスラーム改革主義運動という文脈」(p.28) が重視されると同時に、東インドという現場の状 況が再構築される。以下, 章ごとにその内容を要 約する。

第1章では、イルシャードの設立者となるスール カティーの学問的背景が明らかにされる。イス ラーム改革主義はエジプトから始まるが、 伝統的 なイスラーム学が教授されるヒジャーズ(マッカ、 マディナ)でも、19世紀後半にはイスラーム改革 主義につながる教育体系を有するマドラサ(西欧 近代式のイスラーム学校) がインド人ムスリムに よって開設された。ヒジャーズには多くの東イン ド出身のムスリムが学んでいたが、彼らもこのマ ドラサに関心を寄せていた。スールカティーは19 世紀末からヒジャーズでイスラーム改革主義の流 れにある学問を習得したが、その学識は伝統的イ スラーム学の最高学府ハラーム・モスクでの教授 資格を獲得するほどであった。さらに、教育改革運 動にも関わり、マッカと東インドをつなぐ学問の ネットワークを通して東インドへ渡ることになった。

第2章では、東インドでのイスラーム改革運動が、アラブ人コミュニティに始まることが述べられる。19世紀末から東インド内外の要因、特に中東アラブ地域からもたらされたイスラーム改革主義がアラブ人の覚醒を引き起こした。1901年頃ハドラミー商人によってバタヴィアに設立された

ジャムイーヤト・ハイルは、いち早くマドラサの 開設に取り組んだ。しかし、アラブ人覚醒の動き は、ハドラミーたちの間で指導的な立場にあった アラウィー (預言者ムハンマドの末裔) の権威に 挑戦する運動も生み出すことになった。アラ ウィーは、ハドラマウトで社会階層の最上位に位 置していたが、移住地の東南アジアでは出身階層 に関わりなく、「アラブ人」として一括りに扱われ た。1911年スールカティーは、ジャムイーヤト・ ハイルの学校の教員として東インドに招聘された が、ムスリム間の平等を唱えてアラウィーの反発 を呼んだ。スールカティーをはじめとする改革主義 者はジャムイーヤト・ハイルの教師職を辞し、1914 年に彼を支持するハドラミーたち(イルシャー ディーと呼ばれる)とともにイルシャードとその 学校を設立する。イルシャードの学校ではプリブ ミのムスリムも学び、イスラーム運動の指導者と なるプリブミが輩出することとなる。

第3章では、倫理政策下のプリブミとアラブ人 の関係が述べられる。東インドでは新しい公教育 制度が発進し、1920年代までに初等教育から高等 教育までを備えるようになった。当初、アラブ人 は公教育に対して否定的な態度であったが、スー ルカティーは1919年にイルシャードの学校にオ ランダ語を教授用語とするエリート初等教育プロ グラム導入を提案した。プリブミ子弟の要望にこ たえるためにイルシャードの学校を公教育制度に 対応させることを意図したのである。アラブ人の みならずプリブミも受け入れようとした「平等主 義」に基づいたものであったが、順調には実現し なかった。また、相次いで誕生したイスラーム諸 団体が参集する東インド・イスラーム会議が1922 年から断続的に開催され、アラブ人もこれに参加 した。プリブミ意識の高揚でアラブ人は周縁的な 立場に追いやられるという曲折はあったが、ムス リムの国際会議への東インド代表選出議論では中 東アラブ地域とのネットワークやアラビア語能力 を買われたり、代表派遣の資金援助を行ったりし て、アラブ人コミュニティ側はその存在感を示し た。スールカティーは代表に選出されるも辞退し たが、カリフ制をめぐる議論においてはアラブ人 優先主義を排する論陣を張った。アラブ人であれ プリブミであれ、すべてのムスリムがイスラーム 共同体の対等な立場の構成員であるという「平等 主義 | を貫いた。

第4章では、イルシャード結成の背景となった アラウィー・イルシャーディー論争が詳しく述べ られる。1930年代前半の争点は当初問題になった アラウィーの優位性にまつわる慣習とは異なり. 尊称"サイイド"が預言者の子孫だけに限定され るべきか否か、および(東インドの) アラウィー たちの預言者の子孫としての系譜は妥当か否かで あった。東インド外のウラマーに「仲裁」要請が なされ, エジプトの東洋連盟, 国際的に著名な改 革派のウラマーであるラシード・リダーとシャ キーブ・アルスラーンが見解を示して両者の和解 を求めた。中東の改革派ウラマーは、これをハド ラミー・コミュニティ内の問題ではなく、サイイ ド・シャリーフの特殊性をめぐる普遍的な問題と して論じた。裁定はイルシャード側に不利なもの で、スールカティーたちはその受け入れを拒んだ。 しかし、その間にアラウィー側もすべてのムスリ ムが対等な立場であるという改革主義者の考えを 受け入れるようになっていた。またイルシャード 側も反アラウィーの姿勢を弱めた。

第5章では、1920年代末以降にアラブ人コミュ ニティ内に起きたアイデンティティをめぐる葛藤 と、その中でイルシャーディーの教育活動の志向 性に生じる変化が描かれる。アラブ人コミュニ ティ内の論争が収束しつつあった1934年、アラブ 人の団体として初めてインドネシア・ナショナリ ズムを掲げるインドネシア・アラブ協会が誕生し た。現地生まれのアラブ人の多くはプリブミのム スリム社会への同化をめざしたのであるが. 「ハド ラマウト志向 | の立場をとるアラブ人はこれに強 く反発した。一方, アラブ人コミュニティの教育 活動は制度化が遅れており、生徒に社会的上昇の 機会を十分に提供できないでいた。エジプトへの 留学生の派遣と東インドでの公教育制度の活用と ふたつの方向で模索が続き、後者についてはオ ランダ語アラブ人学校が誕生した。そのような中, スールカティーの言説にも変化が生じた。アラブ 人とプリブミの連携を重視し、インドネシア社会 の中で教育活動を発展させていくべきだと「現地 志向」を強めるようになった。ただし、アラブ人の帰属意識は依然として流動的であった。イルシャードはインドネシア・アラブ人協会とは異なり、アラビア語をアラブ人性の主な要素と見做していた。しかし、アラビア語教育と植民地の公教育の両立には大きな困難が伴った。

第6章では、日本軍政を経て独立するという激 変のインドネシア社会で、アラブ人の位置も大き く変わっていくことが述べられる。日本軍政下に イルシャードの支部や学校は閉鎖され、アラブ人 が教育活動をホスト社会の「進歩」に適用させよ うとしてきた努力は無に帰し、しかもハドラマウ トとの関係は断絶された。独立後、多くのアラブ 人はインドネシア国籍を取得した。国家形成にお いては、イルシャードはイスラーム政党マシュミ と協力関係を構築し、インドネシアのイスラーム 団体としての地歩を固めた。また、教育の二元的 改革では、宗教学校系統ではなく、一般学校系統 を教育活動の中心とすることを選択し、教授用語 をアラビア語ではなくインドネシア語とした。イ ルシャードは「アラブ人」や「ハドラミー」を表 に出さなくなり、ホスト社会への統合が1950年代 に完成した。

終章では、本書の二つの課題が検証されたことが確認される。まず、イルシャードのイスラーム改革主義的性格が明らかにされた。その指導者スールカティーは「平等主義」を強調し、アラブ人とプリブミの対等な立場での協力関係を主張したが、それが最終的にイルシャードのホスト社会への統合へと導いた。さらに、インドネシアの国家建設と社会統合において、アラブ人とプリブミの間でイスラームが社会的な紐帯、統合の原理としての役割を果たしていたことが強調される。

本書は慎重に議論を進めているために、やや複雑な論理展開をしている印象を受けるが、イスラームについては改革主義やその「超地域性」、また教育に関しては「巡礼」²⁾とその二つの方向(東

²⁾ ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同 体』[2007] で提唱したところの、官僚や就学 者が出身地から地方の中心地へ、さらに首都 へ向かう旅、行政や学校制度の生み出す「巡 礼の旅」のこと。

インド国内と広いイスラーム圏)をキーワードに すれば読み解きやすい。本書の学術的貢献は次の ようにまとめられる。

第一に、先行研究をくまなく精査したうえで、 定説に反論していることである。先行研究ではア ラブ人コミュニティが東インドの新しい教育制度 と距離を置いていたとされたが、これは第2章で ジャムイーヤト・ハイルやイルシャードがオラン ダの教育体系に適合した学校建設を何度も試みた ことを実証することにより、否定された。なお同 章では、イルシャードの教育活動を位置づけるた めに倫理政策下の教育制度が体系的に示されたが、 今までこのように精緻に検証する努力はなされな かった。アラブ人コミュニティの教育活動のみな らず、倫理政策下の教育制度を考察する際に有用 な説明を提供している。

第二に、本書はいくつもの新しい知見をたらし た。スールカティーは、植民地期インドネシアの イスラーム改革運動の「先駆者」として必ず言及 されるが、本書によってはじめてその思想背景が 描き出された。そもそも、同じイスラーム改革派 とされる主流派団体ムハマディヤについては、そ の創始者であるアフマド・ダフランがどのように して改革思想を獲得したかさえ, まだ解明されて いない。それゆえに、イスラーム改革思想の源流 を突き止めた意義は大きい。また、第1章でメッ カでのイスラーム改革主義の動きに言及している が、これは中東・イスラーム研究者もそれほど関 心を向けないできた。興味深いのは、このマドラ サは英領インドのウラマーによって開設されてお り、それに東インドからのムスリムが強い関心を 寄せたことである。非アラブ人ムスリムがヒジャー ズでの教育活動にイニシアティヴを発揮したとい う、ヒジャーズの学問のあまり注目されない側面 を明らかにした。さらに、第4章のアラウィー・ イルシャーディー論争も、初めてその内容が詳し く紹介された。中でも、当時イスラーム改革を牽 引するエジプトのラシード・リダーなどの「権威 ある見解」をスールカティーたちが容易に受け入 れなかったことも、注目に値する。イスラーム法 学は現場のコンテクストが重視されてそこでの知 的営為が勝負となる。法学議論の奥深さの一端を

垣間見ることができる。このような新しい知見は いずれもアラビア語文献の精読から明らかにされ た部分である。

イスラームを主たる研究対象とする場合,思想・観念に拘泥すると地域の事情を軽んじてしまう。逆にオタク的な地域研究をするとひとりよがりにイスラームの「変種」を作り出しかねない。イスラームそのものに関する知識とアラビア語の素養を習得したうえで、地域のコンテクストを踏まえてイスラームを考察する、この長年要求されている手法上の課題に、果敢に取り組んだ研究がやっと日本でも出版されたことを歓迎する。イスラームを考えることは、地域研究に欠落しがちな比較、交流という視点の必要性を喚起させることになることが改めて示された。さらに、イルシャードの一世紀を通して、インドネシアの国民統合の知られざる一側面が明らかにされた。

このように堅実な手法に基づく労作ではあるが. アラブ人コミュニティが東インドのホスト社会に 適応する試行錯誤を繰り返した経緯に説得力をも たせるには、説明不足の感は否めない。まず、ア ラブ人コミュニティとプリブミとの関わりが断片 的にしか見えない。教育活動, 東インド・イスラー ム会議のほかにも日常生活でプリブミとの接点は なかったのか。スールカティーはマレー語もオ ランダ語もできなかったというが、ムスリムの国 際会議の東インド代表の候補者として名前があが るほど信頼を得ていたのであれば、プリブミのウ ラマーとの交流についてもう少し詳しく言及する ことはできなかったのか。それらに言及すること も「イスラームが社会的紐帯としての役割を果た した」という著者の主張をさらに補強するであろ う。また、イスラーム改革思想の中核が「平等主 義」であり、スールカティーもそれが一貫してい ることが強調された。しかし、アラブ人優位主義 を排したり、ハドラマウトへの固執を排してプリ ブミとの融和を説いたりしたのも, スールカ ティーが非アラブ人であるという特殊な立場も影 響したのではないかという疑問も拭えない。

最後に、東南アジア研究でアラブ人コミュニティが研究者の関心をさほど喚起しなかったのは、アラブ人にまつわるなじみのない用語(多くはイ

スラーム関係)や人名がこの人々への接近を阻ん できたこともあろう。読者の理解を助けるために は、用語リストや人名リストがあった方が親切で あったろう。

なお、本書は第17回東南アジア史学会賞(2019年)の受賞対象となったことを付記しておく。

(小林寧子・南山大学アジア・太平洋研究センター客員研究員)

参考文献

アンダーソン、ベネディクト. 2007. 『定本想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』 白石隆:白石さや(訳). 書籍工房早山. (原著 Anderson, Benedict. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso.)

Mobini-Kesheh, Natalie. 1999. The Hadrami Awakening: Community and Identity in the Netherlands East Indies, 1900–1942. Ithaca: Cornell Southeast Asian Program Publications.

富永泰代. 『小さな学校――カルティニに よるオランダ語書簡集研究』京都大学学術出 版会, 2019, iv+389p.

本書は、インドネシアが蘭領東インドと呼ばれた時代のジャワ島に生きた一人のジャワ人女性カルティニについて、富永泰代が1987年に出した論考以来の研究をまとめ上げた渾身の書と言える。「あとがき」にはカルティニ生誕140年を記念して彼女の誕生日4月21日に刊行されると書かれている。そこには著者のカルティニに対する深い思いが感じられる。研究はもちろん客観的に行われるものではあるが、研究者は研究対象に心惹かれ、愛着を持って資料を求めて調査を行い、資料と対話しながら解釈や分析を行うことで、素晴らしい研究成果を生む出すことができるのではないだろうか。本書は、時には抑えきれないカルティニに寄せる想いの迸りさえ感じられ、著者の研究テーマに対する愛着が行間から読み取れる。研究書で

あるとともに読書の楽しみを感じさせてくれる一冊となっている。その一方で、著者の主張と自説が展開される時に、その思いがやや強く出ている記述があることも否めない。それを研究者のスタイルと呼ぶのであれば、読者の好みが分かれるのは致し方ない。

著者はカルティニについて30年にも及ぶ長期にわたり資料を渉猟し、インドネシアとオランダで調査を行った上で、カルティニが書いたオランダ語の書簡を丁寧に読み込み研究をまとめている。研究の転機となったのは、1987年に編集・出版されたカルティニの全書簡集 [Kartini 1987] であった。その書簡集と蘭領東インド時代の1911年にカルティニをよく知り文通相手でもあった当時の教育長官アベンダノンが編集し出版した書簡集との綿密な比較研究は著者によって博士論文として2011年にまとめられている。

本書を構成している全5章は概ねこれまでの著 者の研究論文、特に博士論文を基礎としている。 序章の第3節「本書の構成 | (pp. 24-25) に明瞭に 書かれているように、前半の第1章から第3章で はカルティニが生きた時代のジャワ社会とカル ティニの「世界認識」(「」は著者による)を, カルティニが受けた教育と読書を中心にして描き 出している。特に第3章はカルティニの読書リス トを手掛かりとして、カルティニという一人の人 物の内面と世界観を描き出しており非常に興味深 い章となっている。第4章と第5章では全書簡集 が出版されて初めて明らかになったカルティニの 社会活動や政策提言、特にカルティニが力を注い だ木彫工芸振興活動, 伝統社会での女性の地位, 教育に関する考え方を中心に論じている。従来の 研究ではオランダの倫理政策の文脈の中にカル ティニは位置付けられ、1911年版の編集者である アベンダノンを中心としてオランダ人によって与 えられた「近代精神」を体現する「原住民」とし ての役割を演じさせられてきたとして、それらを 批判的に論じる。さらには、カルティニが良妻賢 母、民族主義の先駆者、フェミニズムの先駆者、 教育家として語られていく言説がどのようにして 生み出されていったのか、貴族の名前である「ラ デン・アジュン・カルティニ」という呼称を手掛 かりに解き明かしていく。ここから本書が目指すのは、「オランダの倫理政策の文脈によるカルティニ表象の修正を図り、さらに、『インドネシア民族主義の先駆者』に回収されない新たなカルティニ像を提示する」(p. 25) ことである。

その本書の目的に沿って、カルティニ言説が時 代の要請に合わせて都合の良いように使われてき たことを、カルティニのすべての書簡を丁寧に分 析することによって指摘しようとする。アベンダ ノンらによる女子校設立運動を円滑に進めるため の宗主国オランダに忠実なジャワ人として、ある いは民族の母(後に独立英雄に列せられた)とし てカルティニ言説は使われたと著者は論じる。本 書による徹底した書簡研究は、従来のカルティニ 研究を超える丁寧な傍証資料に補完され一つの完 成に達していると言える。本書の目論見は概ね成 功していると言えるが、留意しなければならない のは著者が副題で自ら断っているように、この研 究はあくまでカルティニのオランダ語書簡という 資料の解釈から描き出された一つのカルティニ像 であることである。例えば、小林寧子が著者の博 士論文の研究成果を含めて様々な資料を有機的に 使って21世紀の今日までの歴史の中でカルティニ を再評価しカルティニ像を描き出したものとは異 なる [小林 2018]。また、欲を言えば KITLV (オ ランダ王立言語地理民族研究所) 所蔵のアーカイ ブズ (No. 897) 以外にも、個人のものであれ団体 や組織あるいは東インド政府のものであれ、ハー グとジャカルタの公文書館に保管されているアー カイブズを資料として使うことができていれば, より多くの発見が得られたかもしれない。植民地 時代のインドネシアで、オランダ人と親交や関係 があったインドネシア人についての記録は、大抵 は政府の報告書に現れる。それらの記録は時には 各種の政府刊行物 (verslag) に登場することさえ あるが、本書ではそれらは資料として使われてい ないようである。一方で、当時のオランダ語の新 聞や雑誌が傍証資料として使われているのは注目 に値する。

著者が参考文献の「その他」として挙げている 上記の KITLV 所蔵のアーカイブズであるが、評者 が調べたところ、現在はライデン大学図書館に移

管されている。歴史ある研究所の KITLV 自体は今 なお研究機関として活動を続けているが、その図 書資料,写真資料,アーカイブズ資料からなる全 てのコレクションは2017年3月にライデン大学図 書館内に Asian Library が設置されたのを機に移 管されている。同図書館のカタログで Collectie Kartini を検索してみると、特別コレクションとし て保存されているアーカイブズだけでも414点が ヒットし、本書で使われているこの資料も「DH 897-23 のように枝番が振られて所蔵されている。 また写真はライデン大学図書館デジタル・レポジ トリの中で171枚がヒットし、カルティニの写真 はもとより、カルティニが描いたと思われる白鳥 の絵や彼女が作成したと考えられるろうけつ染め の布などの写真も含まれていることがわかり、カ ルティニに関する資料の膨大さに圧倒される。そ れは当時いかにオランダ人がカルティニに興味を 示したかを物語るものであり、著者が指摘する「虚 像」が創造されていったことを暗示しているとも

本書の序章で著者は1911年版の書簡集はアベン ダノンの「ラデン・アジュン・カルティニ物語」 であると断じ (p.23), 著者の問題意識がはっきり と打ち出されている。しかし、そもそも編集する ということは編集者の目的や意図があって行われ るものであり、「恣意性」という言葉はやや強い言 葉のように感じられる。著者が指摘するように確 かにアベンダノンが編集した書簡集によってカル ティニ像が創造されたという側面もあるが、それ はアベンダノンが意図していた方向へ進んだかど うかはわからない。最終的には書簡集によってカ ルティニ像が一人歩きしたのである。1911年版の 書簡集と1987年の全書簡集との共通する部分をイ タリックにして可視化を試みているのは大変便利 で興味深いのだが、新たに訳出し引用した書簡の 中に「中略」があるのは、読者としてはもどかし い。例えば、一夫多妻制についてカルティニが嘆 く書簡の一部 (p. 223; [Kartini 1987: 90]) を原文と 照らし合わせてみると、著者が省略している部分 はさほど長いわけではなく「中略」とした意図が はっきりしない。他の書簡については紙幅の制限 があったのかもしれないが、その都度オランダ語 (誰もが読めるわけではない)の書簡集に当たらな ければならないのが不便であるだけでなく、編集 されて削除されたカルティニの言葉を詳らかにす るという本書の問題関心がぼやけてしまう。1987 年の全書簡集の中に収められている書簡をいくつ か読んでみると、直接的な筆致でカルティニの自 由な考えや思い、感情が綴られている書簡もあり、 著者が指摘するように全書簡集の出版によって初 めて生身のカルティニの声が聞こえるようになっ たことがわかる。一方で、それは私信である書簡 が公開されたということであり、カルティニをよ く知るアベンダノンが取捨選択し、時には「切り 貼り」して書簡集を出版した理由の一つでもある のだろう。それゆえに Door Duisternis tot Licht (直 訳は「闇を通って光へ至る」)(p.3脚注)と題さ れた1911年版は、いみじくも著者が指摘するよう に史資料ではなく「物語」として読むべきなので ある。

本書ではカルティニについての先行研究が丁寧 に調べられているが、1987年の全書簡が出版され た後の研究に言及している中で、コーテ(I. Cote) の一連の研究成果を「筆者が批判の対象とする インドネシア民族主義の中に位置付けられたカル ティニ研究に関する叙述を, 超えるものではない」 (p.23) と簡単に片付けてしまっているのは、コー テの研究の方法論が著者のものと近いこともある だけにもう少し詳細に紹介し、研究の観点の違い が述べられていると本書の意義がより明確になっ たのではないか。もう一点、本書の題である「小 さな学校」について、どういう意図でこの題とし たのか「結語」(p.351) の中でやっと説明される が、その題に込められた意味の説明が原文ととも に冒頭でされる方が読者には親切だったと思わ れる。

英語ではカルティニの書簡集の全訳がコーテに よって出版されているが、未だ邦訳は出版されて おらず、著者の手による日本語版の出版が望ま れる。

最後に本書の構成を紹介しておく。

序 章 Door Duisternis tot Licht と Brieven 第1章 背景——閉されたジャワ社会の下で 第2章 カルティニの生涯

第3章 カルティニの読書

第4章 カルティニの社会活動――ジュパラの 木彫工芸振興活動

第5章 失われたカルティニの声を求めて―― カルティニの理想と現実

第6章 「光と闇」をめぐって——1911年版書 名と編集の考察

結 語

カルティニの全書簡を再解釈することにより、著者は「カルティニは相異なる文化価値の仲介者であり、従来から言われる単なるオランダ語による仲介者とは全く異なる。同時に、カルティニは貧困を社会の問題と捉え、社会的に弱い立場にある人々に寄り添いその声を代弁した」(p.349)と結論づけている。書簡から聞こえるカルティニの心の声に耳を傾けて書かれた本書は、著者が師と仰ぐ土屋健治が28年前に『カルティニの心象風景をより広げることに貢献するものとなっている。

(森山幹弘·南山大学国際教養学部)

参考文献

Kartini. 1987. Brieven aan mevrouw R.M. Abendanon -Mandri en haar echtgenoot met andere documenten, compiled by F. G. P. Jaquet. Dordrecht; Providence: Foris Publications.

小林寧子. 2018. 「国家・英雄・ジェンダー――カルティニ像の変遷」『歴史の生成――叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』 小泉順子(編), 23-73ページ所収. 京都:京都大学学術出版会. 土屋健治. 1991. 『カルティニの風景』 東京: めこん.

細田尚美. 『幸運を探すフィリピンの移民 たち――冒険・犠牲・祝福の民族誌』明石書店, 2019, 395p.

著者のフィールドワークは,2000年から2017年までの間にフィリピン・サマール州カルバヨグ市

にあるパト村(仮名)という移民の出身村と、移住先であるマニラの「分村」で実施された(その内、村での住み込み調査はのべ2年半に及ぶ)。本書は、そのような長期間にわたる、参与観察と聞き取り調査(その中心は29人を対象としたライフヒストリー)という質的調査だけでなく、世帯調査など量的調査によって得られた、まさに「分厚い」データにもとづいて書かれた民族誌である。ただし、書評の最後に触れるように、パト村の村民と出身者に対する密度の濃い調査によって書かれた民族誌であるだけに、一部に「パト村中心主義」とも表現できるような問題点を有することは否めないことである。

評者自身は、台湾でインドネシアの、おもにジャワ島出身の介護/家事労働者(女性)と漁船員(男性)の人類学的な調査を2010年以降、断続的に実施している(その成果の一つは小池 [2019])。そのような片手間の調査とは根本的に異なる、調査期間だけでなく、調査テーマの掘り下げという点でも、まさに本格的なフィールドワークの成果が本書では展開されていて、ほんとうに読み応えのある民族誌になっている。

フィリピンの移民に関する研究は国内外におい て経済学・社会学・文化人類学などの分野で、す でに数多く公刊されているが、本書の最大の特徴 であり、その学問的貢献といえる点は、題名にあ る「幸運を探す(サパララン)」と、副題の「冒険・ 犠牲・祝福」という3つのキーワードによく表れ ている。村人を移動にかりたてる理由は、たんな る経済的要因や社会的ネットワークだけで説明で きることではなく、著者がとくに注目するのは、 「幸運探し」という「冒険」にもつながるような移 動の意味付けであり、これは「犠牲」と「祝福」 という信仰実践(カトリックだけでなく、ローカ ルな霊的存在も含む広義の信仰)と密接に結びつ く概念である。このように、「双方親族」や「ネッ トワーク」など頻出する人類学の分析概念に依拠 して移民という現象を説明するのではなく、「移民 たちの観点からみた移動を描く」(p.20) ことが、 本書の魅力となっている。

本書は、序章と終章のほかに、3部に分かれた 計8章から構成されている。以下に、各章の内容 を概観する。

序章「冒険とつながりの民族誌に向けて」では、本書のもととなった調査と、本書の目的とキーワードなどをまとめている。つづく第一部「サマール島における人の移動」は2章からなる。第一章ではマクロな視点からサマール島における移動を概観している。第二章では、サマール島西岸に位置するパト村という農漁村に焦点を当てて、そもそも村自体が移住によってどのようにして形成されたのか、そして現在に至るまでの村人の移住史と移動パターンを整理している。ここで興味深いのは、女性のほうが男性よりも都市部に向かう傾向が強く、より若い時点で労働を開始するというというジェンダー差である。

第二部「運命とサパララン」では、本書の中心 的テーマであるサパララン(幸運探し)を取り上 げている。第三章ではサパラランという語の意味 を検討する。村人は自らの意思で「幸運(豊かさ)」 を求めて移動するが、それはリスクを伴う行為で あることが確認される。つづいて「サパララン最 前線」としてのマニラを取り上げ、マニラに形成 されたパト村出身者の二つの「分村」が成立され るまでの経緯を記述し、分村ができたことで村人 にとってサパラランに含まれるリスクが低減され たと述べている。この章の最後に「新たなサパラ ラン最前線」としての外国を取り上げ、海外への 出稼ぎだけでなく、国際結婚の動向についても言 及している。第四章では村人のライフヒストリー をもとにしてサパラランの具体的な過程を明らか にする。最後にサパラランに対する評価が描かれ、 肯定的な評価だけでなく, 否定的に捉える村人も いることも触れられている。

第三部「幸運を通じたつながり」は、「幸運」という概念について宗教的側面と社会的側面からアプローチしていて、本書の中心をなす議論を展開している。第五章は、サパラランとの関係から村人の信仰実践を鮮やかに描き出している。普通ならフィリピン人の宗教生活を「フォーク・カトリシズム」という枠組みで分析しがちであろうが、本書の独創的な点は、不可視の「友だち」という霊的存在から第五章の記述を始めていることである。「タンバラン(呪医)」は「友だち」の力を頼っ

て治療行為をおこなう。また、時空を超えて「友だち」が「幸運探し」に関わる事例を紹介する。つづいて土地の神や祖霊に言及した後、パト村の住民の9割を占めるローマ・カトリックに関わる信仰実践を詳細に論じている。「幸運」と密接に関係するのは神の祝福であり、その前提になるのがサクリピショ(犠牲、神に捧げる行為)である。「家族のため」という言葉に典型的に表現されるような利他的行為をする人が幸運を授かるというモラルが村びとの規範として重要なのである。

第六章ではブオタンがキーワードになっている。「ブオタンな人」というのは、村人の間で非常に重視される評価であり、「神のような慈悲の心に基づいた分け与えをするモラルに準じた人」(p. 26)を指す。この章ではパト村における家族・親族関係を「食の共有」という点から論じている。「食の共有」に象徴されるように助け合うのが親族なのである。このような親族論は、序章で触れているようにカーステン(J. Carsten)の「つながり(relatedness)」という概念を参照し、血縁にもとづく「である関係性」よりも「食の共有」などによる「になる関係性」を重視している。故地の家族に対する移民のパダラ(送金)やパサルボン(贈り物)は、「幸運の分け与え」という意味をもち、家族・親族というつながりの再確認の契機となっている。

第四部「つながりの揺らぎと再編」は、「分け与 え | によってできる「つながり | という理念が都 市部に移住した人びとの間でどのように揺らいで いるかを論じている。ここで議論の焦点となるの は、富の分配をめぐって日常的に起きる対立やす れ違いである。第七章では、「複ゲーム状況」「杉 島 2014] という概念に依拠して、「家族・親族は 助け合う(相互扶助) という理念が、実際に棚上 げされたり, 一部変更されたり, また強い強制力 を持ったりする場面を取り上げる。最初に、相互 扶助と自助努力という理念を状況ごとに使い分け てマニラの分村で生き抜いている「成功者ジェイ」 の事例と、相互扶助を拒否する「逸脱者ラケル」 の事例とを対比させて議論を進める。また、ジェ イは麻薬密売をしているという噂もあり、ジェイ を避ける村人もいる。一方、教育を受けて最後は 公立大学の教員となり、カルバヨグ市の郊外に住 む「プロペショナル(ホワイトカラー職員)アレヒン」の事例にも言及する。自助努力を重視するアレヒンは、出身地パト村の親族には経済的援助をせず、年に一度フィエスタの時にしか村に行かなかった。この章の最後に「幸運者」という称号で呼ばれる富を得た村人は、自助努力と相互扶助の複ゲーム状況を巧みに生き抜く「両立者」だと論じている。

第八章は、出身村とのつながりが消える人がい るかどうか、そして消えるとしたらどのような状 況なのかを検討している。マニラで暮らす移民二 世は、パト村で使われるワライ語を話すことがで きず、頻繁に村を訪れることはなくなっている。 しかし、守護聖人への願掛けという宗教的なつな がりが維持されているケースもある。また、中間 層住宅で暮らすようになったロイダはアドベンチ スト教会に改宗し、村とのつながりは薄らいだが、 それは固定的なものではなく、状況に応じて村と のつながりを強化することもある。さらに著者は 海外で暮らす国際移民と村とのつながりを検討す る。国際結婚した女性と比べると、海外就労者は 定期的な送金という形で近親者とのつながりを維 持する傾向がある。ただし、海外で村のモラルと は異なる価値体系に触れ、価値観の変化によって 村とのつながりが極端に弱まることもある。ただ し、必要によっては村とのつながりが再活性化す ることもありうるのである。

終章で本書の内容を総括し、さらに本論とは異なった角度から幸運とつながりという概念を再検討し、本書を結んでいる。ただし、「カジノ資本主義」や「土地の持ち主」という概念を唐突に持ち出すのは、これまでの本書の議論を考えると蛇足といえよう。

評者が本書をもっとも評価する点は、従来の文化人類学の分析概念や定型の記述のパターンにとらわれずに、「当事者たちの具体的な行為やかれらによる意味づけを分析の出発点とする」(p. 194) ことである。このような本書の長所のために、退屈な思いをすることなく、395頁に及ぶ大著を新鮮な発見に導かれながら読み進めることができた。当初、本書を読み進めながら、移民を送り出す家族・親族に関する記述はどうなっているのかとい

う疑問がすこし感じられた。しかし、第六章に至り、その疑問は氷解し、本書の構成の巧みさを感じるようになった。従来のオーソドックスな民族誌だったら、第五章は「パト村の宗教」になり、第六章は「パト村の社会関係と親族」という平板な題目が付いていたのかもしれない。そうではなく、「第五章 祈りの世界のサパララン」というタイトルの下に、幸運を探しに移民に出る村びとの宗教生活を「友だち」という不可視の霊的存在も含めて鮮やかに描き出し、そして「第六章 ブオタン精神がつなぐ移民と村の人びと」では「つながり」という視点から移民と家族との関係を論じている。本書はまさに全体論的な視座から豊富な事例を使ってパト村の移民の多様な姿を描くことに成功している。

本書全体を通して残念な点は、上記のような長 所が最後まで首尾一貫して守られていないことで ある。第七章は「複ゲーム状況」という分析の枠 組みのなかに押し込まれて議論が進んでいるよう に感じられるし、すこし議論が平板だという印象 を受ける。もちろん「複ゲーム状況」という概念 自体の有効性をここで否定するわけではないが. 本書を通していたトーンが、この章ですこし乱れ ているのは確かである。また、「図7・1 村出身 者の間にみられる富の量と富の分配範囲の相関」 (p. 285) という図とその説明は、別の意味ですこ し不満に感じる点である。社会的・経済的に成功 し都市の郊外に住むアレヒンを「分配範囲が狭い」 一人に位置付けている。もちろん、ある時点で固 定して、人びとの関係性や富の分配を把握すると いう意味では、この図のような分析手法は妥当で ある。しかし、より動態的にみていけば、アレヒン はパト村という社会空間を離れ、村とは異なる都 市郊外という空間のなかで、それに見合った社会 関係を築き、またパナイ島出身の妻方の親族との 間にはじゅうぶんに「分け与え」が認められる。 本書は人の移動の研究である以上、パト村という 定点にこだわり過ぎることなく、より柔軟に次か ら次へと人が移動先で築きあげる多様な「つなが り」にも、それ相応の注意を払って調査研究を進 めることこそ、著者が主張する「幸運探し」の実 態に合っているように考えられる。「パト村中心主 義」と呼べるようなことは、著者による長年にわたってフィールドに深く入り込み、村出身者との間にラポールを築き上げてきた調査の些細な問題点ともいえるかもしれない。

(小池 誠·桃山学院大学国際教養学部)

参考文献

小池 誠. 2019. 「台湾の高齢者介護を支えるインドネシア人移住労働者」『比較家族史研究』33: 56-79.

杉島敬志(編). 2014. 『複ゲーム状況の人類学 ——東南アジアにおける構想と実践』東京: 風響社.

増原綾子;鈴木絢女;片岡 樹;宮脇聡 史;古屋博子.『はじめての東南アジア政治』 有斐閣. 2018. xxi+302p.

本稿では、はじめに本書の概要と特徴、そして 東南アジア政治の入門書的書籍としての本書の強 みを述べ、続いて本書の構成を概観する。最後に、 本書の強みと対を成す本書の弱みについて評者の 考えを述べたい。

本書は有斐閣のテキスト・シリーズ「有斐閣ス トゥディア」から出版された、「大学に入って初め て東南アジア政治を学ぶ学生を主な読者としてつ くられたテキスト」(p.i) である。本書の狙いは、 東南アジア政治についてほぼ知る機会のなかった 読者に理解を深めてもらうことであり (p.iv), ま た、読者が本書を批判的に読むことで多様な視点 から東南アジア政治を考察すること (p.iv). 東南 アジア政治の面白さに気づいてくれる読者が出て くること (p. 289) を期待する。本書の著者たちは いずれも中堅の東南アジア研究者であり、その研 究対象地域はインドネシア, マレーシア, タイ, フィリピン、ベトナムと幅広い。またそれぞれが 地域研究だけでなく他の学問分野(比較政治学, 文化人類学, 宗教社会学, 国際関係論) にも精通 している。多様な地域的・学問的背景をもつ著者 たちによる本書は、以下にみるように、東南アジ ア政治に対する幅広い視点を読者に提供している。

本書の大きな特徴は2つある。第一の特徴は、 東南アジア政治を3つの視点から説明する点にあ る。これまでに出版された東南アジア政治の入門 書的書籍には、主に3つのタイプがあるが、本書 はどのタイプにも属していない。第一のタイプは、 地域研究的な視点から, 東南アジア諸国の政治に 概ね共通するテーマ(伝統的王国,植民地化,国 民国家建設 地域統合など)を各国の事例を引き つつ説明する書籍である「山本他 1999; 中野他 2016; 岩崎 2017]。第二のタイプは、これもやは り地域研究的な視点から、東南アジア諸国の政治 史を国別に説明した書籍である「清水他 2018]。 そして第三のタイプは、比較政治学の視点から、 東南アジア諸国の特徴を政治学的テーマ(政治体 制,司法制度,政軍関係,市民社会など)に沿っ て国家間で比較・分析した書籍である「中村 2012]。 また第一のタイプと第三のタイプが組み合わされ た書籍もある [山本 2017]。

本書は、上記の3タイプの特徴を全て併せ持つテキストである。すなわち、第I部では主に地域研究的な視点から、東南アジアの現代政治史を国別に紹介し、第II部では比較政治の観点から、各国の政治的特徴をテーマ別(詳細後述)に比較・分析し、第III部では再び地域研究的な視点から、国際政治に関連して東南アジア諸国にほぼ共通するテーマ(詳細後述)を、特に関係が深い国の事例を引きつつ説明している。

本書は上記3つの視点(各国政治史、比較政治、国際政治)から見た東南アジア政治を300ページ強のテキストにコンパクトにまとめている。終章を除き、各章の分量はおおよそ20ページである。本来3冊分に匹敵する内容を1冊のテキストにおさめるのは容易ではない。東南アジア政治に関するどのような情報・知識をどこまで読者に伝えるのか、また、どのように説明するのかを相当に吟味しなければならない。紙面の都合や本書の目的との整合性のため、やむなく掲載を断念した項目もあるだろう。本書の「読者に何を、どこまで、どのように伝えるか」の基準は一貫しており、著者どうしで合意した掲載基準を徹底して守っていることがうかがえる。著者たちの精励刻苦が伝わってくる。

本書の第二の特徴は理解容易性である。本書は 非常に読みやすい。冒頭で述べたように、本書の 主な読者対象は東南アジア政治を初めて学ぶ学部 生である。本書の著者たちは、それまで東南アジ ア政治についてほぼ知る機会のなかった読者にい かに明確に、わかりやすく、東南アジア政治の特 徴を伝えるかに細心の注意を払っている。

また本書は学生だけでなく、大学で東南アジア 関連の授業を担当する大学教員にとっても使い易いテキストである。日本の大学ではおそらく多くの場合、東南アジア政治は地域研究的要素の強い 「東南アジア概論」や「アジア概論」、あるいは政治学的要素の強い「比較政治」や「国際関係論」といった科目のなかで扱われ、全15回の講義の一部あるいはメインとなる。地域研究系、政治学系のいずれの科目であっても、本書を読めば、東南アジア政治に関する数回分の授業をどのように進めればよいか、レジュメとスライド資料をどのように作ればいいかが容易に想像できる。

たとえば各章の内容はおおよそ講義1-2回分の 分量であり、また、各章の最初のページにある枠 囲いの Introduction は講義の初めに述べる「今日の 講義のポイント」として利用することができる。 本文はできる限り平易な文章で書かれているため. 講義用にさらに平易な言葉遣いに直す必要がほ とんどない。また章内に適宜配置された Column は、その章のテーマ(=その週の講義テーマ)に 関連する東南アジア研究あるいは政治学の重要な キーワードを簡潔に説明している(例えば華僑・ 華人, 巡礼圏, 政治体制を測る指標など)。さらに 各章の最後には「読書案内」として参考文献が付 され、各文献の短い説明文もついている。本書に は他にも授業準備に必要な情報が各章に的確に かつ簡潔に詰め込まれている。教員にとって非常 に親切に設計されたテキストといえる。本書を ベースにすれば、授業準備のための時間と労力を 大幅に軽減することができるだろう。

以上の2つの特徴は、本書が学生に対する効果的かつ効率的な知識提供に長けたテキストであることを示している。しかし同時に、これらの特徴は良質な知識提供型テキストゆえの落とし穴をも内包している。落とし穴とは何か。これについて

論じる前に、まずは本書の構成を確認しておき たい。

本書は三部構成であり、第I部(第 $1\sim7$ 章)は 各国政治史である。第1章では国民国家以前の東 南アジアにほぼ共通する政治的特徴がテーマ別 (前近代国家、植民地化、ナショナリズム、脱植民 地化)に概説され、第2章から第7章では植民地 時代以降(タイの場合は絶対王政下の近代化以降) の各国政治史が国ごとに紹介されている。第2章 はマレーシア、シンガポール、ブルネイ、第3章 はフィリピン、第4章はインドネシアと東ティモー ル、第5章はタイ、第6章はミャンマー、第7章 はベトナム、ラオス、カンボジアである。

第Ⅱ部(第8~11章)は比較政治である。国民国家建設(第8章),政治体制と体制変動(第9章),経済成長と分配(第10章),民主主義(第11章)という4つの政治学的テーマを軸として,東南アジア各国の政治的特徴と諸課題が整理されている。たとえば第9章では,政治体制と体制変動に関する下位テーマとして,民主主義と権威主義,権威主義体制の支配の仕組み,権威主義体制における国家と国民の関係,政治体制の持続と変動などが設けられ,これらの下位テーマに沿って各国の特徴や共通点,相違点が整理されている。

第Ⅲ部(第12~14章)は国際政治である。第12章では国際政治の中の東南アジアに焦点が当てられ、冷戦期およびポスト冷戦期の東南アジア各国の対米・対中・対ソ関係が主に説明されている。第13章では、ASEANを中心とする東南アジアの経済統合の過程と政治統合をめぐる課題が整理されている。第14章では人の移動と政治をめぐる諸課題(越境する不法活動、国際労働移民、人身取引、難民など)が各国の状況を示しつつ指摘されている。そして終章では、日本と東南アジアの関係史が述べられ、現在そして今後の日本と東南アジアの関係にも目が向けられている。

以上に見るように、本書の内容は非常に多岐にわたる。本書はこれらの内容を明解かつコンパクトにまとめており、読者は各章のポイントをほぼ読解の苦労なく掴むことができる。これは本書の強みであると同時に、以下の2点において、本書の弱みにもなっている。

一つ目は、本書の明解さの裏側にある、読者自 らが解釈する余地の少なさである。本書は基本的 に情報・知識伝達型のテキストであり、実際に起 きた出来事を中心にまとめられている。ゆえに. 特定のテーマに沿って答えがひとつではない議論 や答えることが容易ではない課題を章ごとに示し. 読者に自分の力で考える機会を提供するタイプの テキストではない。また、読者が本書の説明を「な るほど、そうなのか」と鵜呑みにせず、「いや、待 てよ。この説明でいいのか?」と直感的に問うこ とは、その明解さゆえに難しい。本書は東南アジ ア政治に関する学生の理解を促すことはできても. 学生の考える力や批判的に読む力を促すには少々 不十分である。教員が本書を授業で使用する場合 には、本書の内容をただそのまま講義するのでは なく. 学生が別の議論の仕方や別の視点があるこ とにも気づくことができるよう上手くナビゲート する必要がある。

二つ目は、多様な内容をコンパクトにまとめたがゆえに、本書から東南アジア政治のある側面が抜け落ちたことである。それは「人の顔」である。本書に登場する東南アジア各国の主要な政治アクターは、その名前や実施した政策、歴史的に重要な活動については述べられているものの、他方で、彼らが一体どのような人物なのか、どのような環境に育ち、どのような思想を持つに至ったのかについては触れられていない。おそらくページ数の都合によるものであろう。しかしそのために、残念ながら本書を読んでも東南アジアの政治指導者たちを具体的にイメージすることができない。

読者が何をもって東南アジア政治の面白さに気づくかは人それぞれであるが、東南アジアの「人」に興味をもつというのも、一つのきっかけになり得るだろう。評者はまさに「人」への興味から東南アジア政治研究の門をたたいた。もちろん本書は十分に魅力的なテキストである。しかし、その内容のコンパクトさゆえに、読者が東南アジア政治研究の面白さに気づくきっかけのひとつを失っているように思えてならない。

また、本書からは著者たちの「研究者」として の顔が見えてこない。本書から見えてくる著者た ちの顔は、大学生に東南アジア政治を教える真摯 な「教育者」としての顔である。しかし著者たちは大学の教壇に立つ教員であると同時に研究者でもある。それぞれの著者はいま東南アジア政治のどういった事象に興味があり、どのような政治・社会課題について熟考しているのか。現在の事象に対してどのような考えをもっているのか。これが見えてこない。

これまでに出版された東南アジア政治の入門書的書籍においては、各章の最後の段落になると「研究者」としての著者が顔をのぞかせ、著者自身の考えや意見、研究動向への期待、自身の今後の研究姿勢や研究課題への言及がみられる。しかし本書の場合、各章の最後の段落は、章のまとめとして客観的・俯瞰的な文章で締め括られることが多い。明らかに著者個人の志向が述べられた章は、「ASEAN 各国が、(中略)国際政治における重要なアクターとして存在感を発揮しうるか、注視したい」(p. 236)という言葉で締め括られた第12章のみである。

読者である学生たちが東南アジア政治を「習う」のではなく、「興味をもって、自分で調べて、考える」ようになるには、これまで東南アジア政治についてまさに自分で調べて考えてきた「研究者(= 実践者)」である著者たちが、なぜ自分は東南アジア政治に興味を持ったのか、東南アジア政治から世界の何が見えてくるのか、についてもう少し自身の考えや意見を読者に伝えてもよかったのではないかと思う。欲を言えば、本書の最後のページにある「おわりに」で、もう少し著者たち自身の声を聴きたかった。

もちろん、どのような教科書でも掲載できる知識や情報の量には限界がある。学部教育の場合、その限界を補う方法の一つが講義であろう。おそらく著者たちは、本書を講義に使用する際には、東南アジア政治の面白さや自ら調べ考えることの意義については口頭で学生に伝えるものと思われる。そしてその役割は、本書を授業に使用するであろう他の東南アジア研究者たちにも期待されているように思われる。東南アジア政治に興味を持つ学生を増やすことは、著者たちだけのミッションではなく、東南アジア政治研究者全体のミッションである。自戒の念も込めて、大学の授業は情報・

知識の伝達に工夫を凝らすだけでなく、教員が研究者としての生の姿も多少晒しながら、自らの経験や考えも交えて講義テーマの面白さや意義を多角的に伝えることが肝要なのではないかと本書を読んで感じた。本書のおかげで短縮できる授業準備の時間を、テーマそのものの面白さや、自ら探求することの意義をいかに学生に伝えるかを考えるために充てたいと感じた次第である。

(森下明子・立命館大学国際関係学部)

参考文献

岩崎育夫. 2017. 『入門 東南アジア近現代史』東京:講談社.

中村正志 (編). 2012. 『東南アジアの比較政治学』 千葉:日本貿易振興会アジア経済研究所.

中野亜里;遠藤 聡;小高 泰;玉置充子;増原 綾子. 2016. 『入門 東南アジア現代政治史』 (改訂版) 東京:福村出版.

清水一史;田村慶子;横山豪志(編著). 2018. 『東南アジア現代政治入門』(改訂版) 東京:ミネルヴァ書房.

山本信人(監修・編著). 2017. 『東南アジア地域研究入門3 政治』東京:慶應義塾大学出版会.

山本信人;高埜 健;金子芳樹;中野亜里;板谷 大世. 1999. 『東南アジア政治学――地域・国 家・社会・ヒトの重層的ダイナミズム』(補訂 版)東京:成文堂.

速水洋子(編著).『東南アジアにおけるケアの潜在力――生のつながりの実践』京都大学学術出版会、2019. ix+586p.

本書の特筆すべき点は、ケアのグローバル化が 進展するなかで先進諸国が所与としてきたケア供 給源におけるケアを具体的に論じたことである。 海外人材の受入に対して閉鎖的とされてきた日本 も、2008年から東南アジア3カ国より介護人材を 受け入れてきた。経済連携協定(EPA)や技能実 習制度、留学ビザでの人材導入に加えて、2019年 には在留資格「介護」や特定技能制度も創設され た。こうした過程の中で、「途上国では大家族制で 人々はケアリングである」といった根拠に乏しい 言説が生まれ、多くの介護事業関係者が人材獲得 のために東南アジアに向かっている。ところが、 「外国人介護労働者の出身地域ではどのようにケア が実践されているのか」「ケアの担い手の供給源に おけるケアは、どのように変化しているのか」と いう点については、これまで十分に議論されてこ なかった。本書は、ケアに関する研究の空白を埋 める先駆けであり、一石を投じることになるであ ろう。

また、2000年に始まった介護保険により、日本の介護は家庭から公的領域へと外部化された。しかし、本書で紹介されている東南アジアの実践を見ると、日本のいわゆる「介護」は、広義のケアの一部でしかないという点に気づかされる。コミュニティの役割の再考にあたっても、本書がその一助となるだろう。

本書は4部構成で、序章やプロローグなども合わせると全部で19章からなる大作である。東南アジアの7カ国を対象としており、うちタイを取り上げた章が7本、インドネシアが4本、ベトナムとフィリピンが各2本、ラオスとシンガポール、カンボジアがそれぞれ1本となっている。執筆陣は、人類学や社会学など多様な専門分野の研究者や実践者で構成されている。大作ゆえ全体像を俯瞰するのは容易ではないが、各部の要点は以下の通りだ。

第I部「グローバルとローカル――制度と実践の展開」では、ケアの実践について、主に制度面からアプローチしている。東南アジアにおける高齢者ケアは、「家族主義」と指摘されるように、政府による介入は小さく、家族やコミュニティの役割が大きい。しかし、これは高齢者ケアに関する政策が存在しないという意味ではない。例えば、各国におけるアクティブエイジングの実践はもともと国際機関に由来する場合も多く、それは各国の保健省や福祉省などの政府が主導する政策と言えるだろう(第2章)。ラオスでも、国際機関が国内の政策を先導している点が指摘されている。また、本書では触れられていないが、日本政府もアジア諸国の高齢者政策には強い関心を示している。

アジア諸国のケアがどう構築されるかを考えるに あたり、本書が政策に与えるインパクトは大きい であろう。

第Ⅱ部「誰がケアするのか? 変わりゆく家族と ケアの揺らぎ」では、親一子のケア規範が環境の 変化に応じてどのように再編成されつつあるのか に焦点を当てている。急速な経済発展や人口移動 (第5章) 人口構造の変化(第6章) ライフコー スの多様化(第7章)といった諸変化に呼応して. 施設への入所(第4章)や独居(第5章, 第7章) といった選択も増えてきているのだが、その際に はケアの実践をめぐる不断の「交渉」が人々のあ いだでかわされる。各章で、規範からの逸脱に対 してどのような選択がおこなわれ、いかにしてケ アが実践されるのかが詳細に扱われており、環境 の変化に対応する実践の柔軟性が見出される。第 6章のティー論文では、ベトナムを対象国とした 計量分析により、地域、性別、年齢、生活水準に 応じて高齢者ケアの実情が異なり、性役割分業に も変化がみられると報告している。またこの章は、 ケアの担い手としての高齢者に焦点を当てている 点でもユニークだ。

第 III 部「移動し往還する人々とケアの広がり」では、ケアをめぐる国内外の人の移動が扱われている。「共にいる空間と時間が重視」(p.288) され、「場」が強調される今日だが、一方で人の移動は活発化している。では、移動によってケアはどう再編成されるのか。国際労働移動が活発なフィリピンでは、トランスナショナルファミリーに対応した、「高齢者 + α 」という世帯方式がとられている(第 9 章)。

第Ⅳ部「間の新たなケア・イニシアティブ―コミュニティと宗教―」では、宗教とコミュニティが題材である。ここでの指摘は、新しいケアのつながりが、既存の組織や地方行政、宗教を基盤に形成されているという点だ。宗教もコミュニティも共に社会関係に埋め込まれているが、とりわけ宗教の役割が強調されている。ケアの生成におけるコミュニティと宗教はこれまで見過ごされがちであったが、介護保険の枠内で完結しがちな日本の「ケア」が、実は矮小化されたものであると気づかされる。

ケアをめぐる自助努力とネオリベラル的言説

本書では、東南アジアの特徴として、「社会関係に埋め込まれた」ケアを強調している(序章)。はたして、それはどのようなケアなのだろうか。他章で、同義と思われるさまざまな表現が使われている。「互酬」(p. 18)、「絆」(p. 69)、「互惠的関係」(p. 157)、「サブシスタンスの共有」(p. 256)、「協働共食の実践」(p. 256)、「つながり」(pp. 256–257)、「共にいる」(p. 281)、共有できる「場」(p. 288)、「一緒に過ごす、訪ね合う」(p. 288)、「バナキュラー」(p. 291)、「柔軟な家族再編」(p. 348)、「ケアの担い手の複数性」(p. 374)、「相互行為」(p. 498)などだ。

これらを言い換えると、社会関係に基づくケアは、有償化されておらず(無償性)、市場化されておらず(非市場性)、相互の関係に基づいた互酬性を有する。こうした特性は、血縁や地縁の形をとることもあれば、宗教を基盤とする場合もあるだろう。人口構成の若い国では、ケアの市場化や国家の介入が限定的なため、逆にこうした社会関係に埋め込まれたケアの占めるウェイトが大きい。

さらに、本書ではそうしたケアを、グローバル に展開する「アクティブエイジング」などのケア と対置している。世界保健機関(WHO)の提唱す る「健康」とネオリベラリズムとの親和性に疑義 を呈しているのだ。つまり、日常生活動作(ADL) の概念に代表されるような. 他者に依存しない自 立した人間像は、個人に回収されるケアであり、 グローバル化する経済とも符合する。そしてアク ティブエイジングとは,「社会的,経済的,文化的, 精神的、市民的な事柄への継続的な参加」を通じ て、高齢者が積極的に社会に貢献し続けることを 意味する。しかし実際のところ、このような「貢 献し続けなければならない | 高齢者像は、伝統的 な高齢者像とは異なる (p. 243)。これら2つの高 齢者像は対照をなしているのだが、アクティブエ イジングは人的資本を形成する方向で用具化され やすく、生産至上主義的である (p.9)。 つまり、 社会関係に埋め込まれた東南アジアのケアは、こ うした個人に回収されがちなケアのオルタナティ ブになり得るのだ。

これは、ケアの枠組みをめぐる重要な問題提起である。本来、ケアは市場経済にはなじまない。それにもかかわらず、実は人々の健康管理を自己責任化することで、ケアはグローバル経済を支える根幹をなしている。個人の健康促進や疾病予防を通じた健康寿命の伸長が、労働力人口の減少という人口構成の変化や国家財政の限界に呼応するためにも、政治的に利用されやすいのだ。

ただし、社会関係に埋め込まれたケアもまた、政治的に利用されうるということを指摘しておく。なぜなら、すでに存在する社会関係を基盤としている点で、即戦力としていつでも利用可能な資源であるからだ。それに、その無償性ゆえに、膨らみつづける福祉財政を抑制する手段として政治化されやすい。一人当たりのGDPが日本より高いシンガポールでさえ、「ケアは家族ですべきもの」とされていて、政府の役割は最小限だ(第1章)。

日本の介護保険においても、要支援のサービスは介護保険から切り離され、自治体(コミュニティ)に移された。つまり、東南アジアのコミュニティにおける、社会関係に埋め込まれたケアであっても、きわめてネオリベラルな動きと親和性がある。ケアに財政や人材といった資源を投入しない体制こそが、自助や共助を前提とするネオリベラルな体制であり、高齢化が進展するなかで、東南アジア社会もそのように位置づけられる可能性を持つ。「女性に優しいコミュニティ福祉」(第12章)は、グローバル経済を支えるサブシスタンスの強化ともとれるのだ。

それに、アクティブエイジングなどWHOによる「グローバル」なケアの論理は、個人を単位としてそのQOLの向上を意図している。これには生存のためのケア(排泄など)、生活のためのケア(買い物など)、自己実現のためのケア(余暇、社会参加など)が含まれる。そして、ここで使われている「参加」という概念は、たとえば労働市場への参加といった経済的な観点だけとは限らず、コミュニティにおける参加―端的には生きがいとか居場所――も指す。確かに日本における「介護」という語に「参加」は感じられにくいが、それは日本の介護保険制度に基づくケア=介護では、身体機能や生活の維持に重きが置かれていて、参

加に対する評価がほとんどないためだ。つまり、 生存や生活のためのケアのみを評価対象としたの が介護保険制度なのである。本来なら社会参加と いった自己実現を可能にするケアが求められるの だが、それを介護報酬にどう反映させるかという 運用上の問題があるため、参加が捨象されている ように映るのだ。

とはいえ、社会関係に埋め込まれたケア=相互 行為や参加を前提としたケアを制度に内部化せず、 軽視してきたという意味において、日本の介護が アジアの事例から学ぶ点は多い。

社会関係に埋め込まれたケアの問題点

エスピン=アンデルセンを嚆矢に発展してきた 福祉レジーム論では、ケアの供給主体である市場、 政府、家族、コミュニティを比較して、それぞれ の特徴を見出してきた。たとえば、アメリカであ れば市場の役割が大きく、北欧諸国では政府の役 割が大きい。アジア諸国であれば相対的に家族の 役割が大きい。どれが望ましいかというものでは なくて、それぞれに長所と短所がある。市場によ るケアでは、需給関係で価格が形成されるため、 必要なサービスが貧困層に行き届かない懸念があ る。政府によるケア(再分配)では、サービスは 全体に行き届くかもしれないが、財政や効率の問 題がある。家族によるケアでは、伝統的規範との 整合性や情緒性はあるものの、性役割分業、無償 労働、質の担保、閉鎖的な環境と虐待の発生といっ た問題が起こりうる。コミュニティによるケアで は、社会参加が可能となるが、第12章で指摘され ているように、家族ケアと同様の課題がある。

日本の介護保険制度は、家族ケアが内包する問題に対応しようとするものであった。それは性役割分業の変更、無償労働の解消、ケアの質の担保である。ところが、高齢者の家族からの相対的な自立は、同時に高齢者の社会関係の断絶をもたらすことになった。こうしてみると、万全なケアの供給系というものがいかに見出しにくいかがわかるだろう。必然的に、社会・経済的な文脈に合わせて4つのケア供給源を組み合わせるケアミックスが現実的である。

ケアの受け手という視点

本書では、社会環境に合わせて柔軟にケアが実践されているという事実を、多くの章で指摘している。では、この柔軟性は、ケアを受ける側のウェルビーングにどう影響を及ぼすのだろうか。ケアは、生存のためのケア、生活のためのケア、自己実現のためのケアなど多岐にわたる。しかし、ケアは本来、他者との相互行為で成立するものであることを考慮すると、ケアを提供する側の行為が必ずしも受け手のウェルビーングに役立つとは限らない。

そして、ケアの定義もまた、その時々で変化し てきた。ケアの歴史とは、「誰のためのケアか」の 変遷である。正しいと思って提供するケアが、じ つは健康維持や疾病予防にとってなじまないこと も多い。たとえば、おもらしを防止するために水 分摂取量を減らすのは、ケア提供者の都合であっ て、高齢者の都合ではない。高齢者は感覚が鈍っ ているため、水分が必要でもそれを表現しないこ とが多く、脱水症状を起こしがちである。また、 ベッドから落ちないように柵を付けることは自由 な動きの制限でもあり、乗り越えようとして重大 事故につながることも多い。これは、現在では. ケアを提供する側を優先した身体拘束の一種とみ なされる。安静と称して高齢者を寝かせきりにし ておくのも、敬老精神にもとづくのかもしれない が、適度な運動は機能維持のためにも重要である。 寝かせきりにしておくと、身体機能の劣化が進行 して、ますますできなくなることが増えるのだ。 座れなくなると、日常生活もままならない。「寝た きりは寝かせきり」という表現は、ケア提供者の 善意の行動が逆効果をもたらす代表例である。

そういう意味では、家族の論理に対して高齢者が独居の「言い訳」として霊魂を持ち出す事例(第5章)は興味深い。これは、ケアの受け手である高齢者の主体的な選択であり、自己防御でもある。住み慣れた土地や社会関係からの離脱は、抑鬱状態や、引きこもりによるエコノミー症候群などを引き起こすことが知られていて、リロケーションダメージと呼ばれる。かつての日本の都市化でもこの事例は見られたし、現在のジャカルタの福祉

施設でも、こどもの誘いで農村部から転居してき た高齢者が都会になじめず保護されることは多い。

ケアの実践は介護者の事情によっていることが 多いが、それがケアの受け手のウェルビーングを 高めるのだろうか。社会関係に埋め込まれたケア は、どの程度ウェルビーングを高めるのだろうか。 今後の研究が期待される。

まとめ

日本は、EPAによるアジアからの介護従事者を受け入れて10年がたった。しかし、ケアの担い手の送り出し国でどのようなケアが実践されているのかは知らないままであった。開発途上国の人々、特に女性が担うケアがどういったものかを知らずに、所与のものとして日本は受け入れてきたのだ。こうした所与とされてきたケアを詳細に記述し、可視化したという点で、本書には大きな意義がある。

本書が扱う社会関係に埋め込まれたケアもまた、 日本をはじめとする先進国では重要視されてこなかった。介護保険制度のような、保険料と税金で賄われた制度にはそぐわないからだ。とはいえ、住み慣れた地域や人々にかこまれ、その環境で高齢者が社会参加を続けられるというのは、彼らの生活の質を維持するうえで、極めて重要である。

ただし、本書では十分に論じられていないのだが、この社会関係に埋め込まれたケアにも弱点があるということを、評者として指摘しておきたい。社会関係に埋め込まれたケアは、現代のネオリベラルな動向によって政治的に利用される危険性があるし、必ずしもケアの受け手にとって最善のものとは限らない。本書を機に、グローバル化されたケアにおける社会関係に埋め込まれたケアがどういった特徴を持つのか、そしてそれが高齢者の生き方を考えたときにどう相対化されるのか、今後の研究の動向が期待される。

(安里和晃・京都大学大学院文学研究科)

福岡まどか;福岡正太(編著). 『東南アジアのポピュラーカルチャー――アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート, 2018, 478p.

17名の研究者による東南アジア各地のエスノグラフィの集合として、充実した本であり、読むのが楽しかった。21世紀初頭の東南アジアの雰囲気を、それぞれの多彩で活発な文化活動を焦点にして把握表現した一冊として、貴重な歴史的資料となるであろう。東南アジア研究の側面と、ポピュラーカルチャー研究の側面から論じてみたい。

東南アジア研究の側面から、20~30年前と比べ て同地域が全体として実に大きな変化を遂げてき たことを改めて認識させてくれた。インドネシア では、かってのナショナリズムの時代には「イン ドネシア語でインドネシア国民に共有される文化 を育む」という目標があり、それに続く開発独裁 の時代には、人々の文化活動は強引な国家介入を 受けていた。事例として、1989年ジャカルタの町 はずれの広い駐車場で、ダンドゥットの人気歌手 ロマ・イラマの野外コンサートが開催されたとき のことをあげよう。ステージ周囲の聴衆は警察官 らによって取り囲まれた形になっており、地面に しゃがみこんで音楽を聴くことを強要されていた。 それでも音楽が佳境に入ると人々は踊りながら立 ち上がろうとし、その度に警察官によって3~4 メートルもある長く硬く重そうな棒で、バシッビ シッと容赦なく首筋や肩や頭や背中を叩かれ、そ の痛みで声もなく座り込むという光景が繰り返さ れていた。コンクリートの広場を埋めた数百の聴 衆には、そうしたステージ周辺の状況は見えない。 音楽の高まりとともに、人々が酔い踊ろうとする 度毎に、それを抑圧し押し殺す無言の空気の波が 伝わってくる。人々の間には、言い知れない不満 が鬱積していく。賑やかなリズムを醸し出す音楽 の誘惑にもかかわらず、波状に伝わってくる重い 空気が、聴衆を音楽から分断し、人々は相互に孤 立したままである。一人の若い女性が身体を揺ら しながら着ている服を脱ぎ、ブラジャーを外し始 めた。うつろな眼差しが見える。連れの男性が. 無言で脱ぎ捨てられた服を拾って着せかける。脱 ぐ、拾う、着せる、脱ぐ、拾う、と二人はいつまでも繰り返す。周りの人々は、二人の動作が視野にはいっているはずなのに、それぞれが異次元に存在しているかのように何らの反応も示さない。やがて広場の全体が夕闇に包まれ、照明もなく、とうとう人々は非日常的な祝祭空間を創出し共に酔いしれることはかなわなかった。本書に記された各地の活発な文化芸能活動とその「場」の描写分析を読みながら「時代が変わった」ことを思う。なお、金悠進による第10章「インドネシア・インディーズ音楽の夜明けと成熟」はこの間の歴史的流れを活写している。

メディア状況の変化も大きい。編者の福岡まどかはインドネシアの「多様なメディアが多数出現している現状」を、先行研究の資料を交えて指摘する。「現地で用いられるほぼすべての言語を用いた出版や放送を担う」「数千の出版社と数百のラジオ局と数十のテレビ局」があり、さらに「推定2000に達する非合法のラジオ局やテレビ局が放送」を行っている(p.32)。この異常なまでの文化情報活動の多彩な活発さは、温度差はあれ、東南アジアの各国に見られる近況であることがわかる。

欧米の研究者たちの中には、文化のグローバル 化とは、将来的に地球上の文化が均質化すること であり、具体的にはハリウッド映画やマクドナル ドが世界を制覇することだと見做す人々がいた。 文化帝国主義論という単純な議論も登場した。し かし本書を読むと、仮にそういう状況が生起する としてもそれはかなり先のことであると容易に推 測される。その前に「多文化の混成する東南アジ ア | における「多様な文化の交流 | によるさまざ まの影響が単純なはずはないのである。福岡まど かも、メディアや、経済や、教育等によって「文 化表現に関する価値観やスタンダードが形成され て広まっていく | 流れがあることを認識しつつ. そこからいきなり結論に向かうのではなく、まず は「文化表現の担い手や受け手」がそれぞれに東 南アジア文化の独自性について考え、模索してい く過程そのものを視野に入れようとする (pp. 28-30)。それが限りなく複雑な過程となるであろうこ とは、本書に収録された各地の文化状況からもよ くわかる。統一的な国民文化の創造に情熱を注い だ時期や,国家による文化表現への統制時期のほうが,むしろこの地域における文化状況にとっては異例な時期であったのかとさえ思える。

半世紀以上も前に、ヒルドレッド・ギアツは インドネシアの社会と文化の多様性を論じた古典 的論文において、インドネシアの島々は海によっ て隔てられていたから多様なのではなく、海とい うハイウエイによって相互につながっていたから 多様なのではないかと議論した「Geertz 1963: 96]。 同地域は世界各地からもたらされる異文化の数々 に「受容性、柔軟性、選択性」をもって対してき たのであり、この文化の交差点における多様性は、 相互間の交流によってこそ説明されるべきだと言 う。同地域の文化社会の多様性、開放性、順応性 そのものが文化の形であり、強さであり、構造的 な特質であるとする。これはインドネシアに限定 されるのではなく、2千年にわたって中国とイン ドと中近東と地中海の諸文明と相対してきた東南 アジアの諸地域に共通するものであるだろう。福 岡まどかもまた「そうした柔軟な受容の力が東南 アジアに共通する特徴である」(p.30) と述べてい る。今後ますます文化・社会・宗教等のグローバ ル化が進行するときに、現地調査に基づいて、文 化は必ずしも常に多様性から均質化に向かって進 化するものではないと指摘することは、文化を研 究するうえでの価値ある提言であろう。

次いで、ポピュラーカルチャー研究の側面から 議論したい。この研究領域はいまだ流動的であり、 どう定義するかについて、編者は数多くの先行研 究に当っており、執筆者間で議論もし、苦労した のではなかろうか。評者は米国の文化研究の傑作 であるリチャード・オーマンの研究 [Ohmann 1996: 11-30〕を推しておきたい。「文化を売ること」で あると同時に「売ることの文化」でもあるマスカ ルチャー/ポピュラーカルチャーの定義はもち ろん、およそ100年前に、「広告」という新しいビ ジネスモデルをえた雑誌が、読者、マーケット、 資本主義, ひいてはアメリカ合衆国社会のあり方 を変えていったことが説得的に展開されている。 マスカルチャー研究においては、利益を追求する 生産者と, 文化的生産物そのものと, その消費者 が研究対象として登場する。一方でポピュラーカ ルチャー研究は、「人気(popularity)」という個々 の消費者の主体的選択そのものの根拠を理解しよ うとする。

本書も「文化の生産・流通・消費のあり方に着 目」(p.39) するが、しかしその枠組みは実現され ているだろうか。経済的には、第5章「フィリ ピン・インディペンデント映画の黄金時代」と第 7章「フィリピンのゲイ・コメディ映画に投影さ れた家族のかたち | において、鈴木勉と山本博之 は、それまでの映画制作のように「制作・配給に 至るまで大手の資本、いわゆるメジャー映画会社 に依存」することをやめ、「35 ミリがだめなら、デ ジタルがあるじゃないか」(p. 199) と、21世紀の 新たなビジネスモデルへ乗り換えた制作者たちを 記録している。20世紀型の大量生産時代のマスカ ルチャーに代わって、小規模でニッチなマーケッ トに向けたポピュラーカルチャーの制作である。 小さなマーケットでは、固有の消費者の「人気」 に照準を合わせ、制作物のデザインを柔軟に変化 させることも容易になる。「創造産業の革新運動 | のただなかで、フィリピン人の多様で流動的な「自 画像の再構築」が行われ、「対話のプラットフォー ム」(p. 182) という用語が示すように、21世紀の 新たな情報プラットフォームの時代に即した文化 の姿を先取りする。

一方で、同じく映画研究の各章――第1章タイ 映画, 第4章ベトナム映画, 第6章インドネシア 映画――においては、映画作品のストーリーや メッセージや社会文芸活動が詳細に論じられる一 方で、なかなか消費者の顔が見えてこない。生産 者の表現意図を、消費者はそのまま素直に鵜呑み するものだろうか。文化的生産物が消費者から獲 得する「人気」は、必ずしも制作者が意図したも のと同じではない。想像力と手間の要る調査研究 領域であるが、ポピュラーカルチャー研究をテー マとするからには避けるわけにはいかない。イン ドネシアの開発独裁時代の映画には、よく「覗き 見」場面があり、主役風の美男美女の動静を、芸 人風のキャラクターの友人や知人が木影やベンチ の下などありとあらゆる状況設定によって覗き見 る。そうした場面ではきまって映画館内は観客の 大きなどよめきや笑い声が起こった。これは影絵

芝居における神々と道化との伝統的役割分担とし て分析するのか、新聞・雑誌・テレビニュースを 見るときの「あ~、スハルト大統領とその仲間は、 こういうことを考えているのか」という当時の 人々とメディアとの関係性の構造を再現したもの とみるのか。東南アジア研究としては、数々の映 画ストーリーの叙述は歴史的な記録であるが、ポ ピュラーカルチャー研究としては、消費者が受容 していたメッセージは何であったのか、明確な言 葉で表現される文学と異なり、音楽や映像をとも なうポピュラーカルチャーにおいては複数のメッ セージの可能性を検討する手順が必要である。文 化的生産物のもつ意味や価値はだれによって規定 されるのか、これはカルチュラル・スタディーズ における根本的な問いである。消費の各段階にお いて消費者によって価値が決められ生み出される のであれば、制作者の意図が正しく他は誤解であ るという区別は無効となる。

本書は、その内容の豊かさにおいて傑出しており、さまざまの現地経験を思い出しながら充実した時間をもてたことを感謝したい。どの章も、拾いあげられた対象や、執筆者による描写が面白く、角度を変えるごとに、異なる図柄が現れた。実は書評もこれで4回目の書き直しである。各章ごとの評価は関本氏の見事な書評[関本 2019]が出たので、そちらに依拠することとした。三部それぞれにコラムが配置されており、それもピリッと味のきいた読み物になっている。読者には忘れずに読んでいただきたい。

(白石さや・東京大学名誉教授)

参考文献

Geertz, Hildred. 1963. Indonesian Cultures and Communities. In *Indonesia*, edited by Ruth T. McVey, pp. 78–84. New Haven: Yale University Press.
Ohmann, Richard. 1996. *Selling Culture: Magazines, Markets, and Class at the Turn of the Century*. London and New York: Verso.

関本照夫. 2019. 〈書評〉福岡まどか;福岡正太 (編著)『東南アジアのポピュラーカルチャー―― アイデンティティ・国家・グローバル化』『東 南アジア――歴史と文化』 48: 93-97.